

演奏会あんない応募用紙

..... (コピーしてお使いください)

スペースが限られておりますので、原稿を整理してお送りください。特別指示がない場合、広告内容が多いものはやむを得ず削除させていただくこともあります。

氏名・団体名

住 所

TEL () FAX ()

お申込み月号

月号

(月18日発売)

枠数

写真点数

校正

枠

点

要・不要

①演奏会タイトル (読みにくい字、特殊な漢字にはフリガナを)

②出演者、共演者 (フリガナ付。楽器・声域も明記してください)

③曲名 (作曲者、編曲者を明記。原語不可。全曲掲載できない場合がありますので、掲載希望順に記入してください)

④開催日・開演時間

⑦入場料金

2019年 月 日() 開演 :

⑤都道府県名

⑥会場名

⑧チケット取扱い

⑨問合せ先

⑩主催・後援・助成など

2月号(1月18日発売)の締切は12月5日(水)になります

応募用紙・原稿は、広告料金と一緒に現金書留でお送りください

特集I

バロック三大巨匠生誕333年 宗教音楽入門ガイド

2018年はバロック三大巨匠と言えるJ・S・バッハ(1685~1750年)、ヘンデル(1685~1759年)、D・スカルラッティ(1685~1757年)の生誕333年、3が3つで「ミサの年」。これを記念して、「ミサ曲」をはじめとしたさまざまな宗教音楽の入門ガイドを特集します。長い冬の夜はぜひ、本誌を片手にじっくりと「宗教音楽」の世界に浸ってみませんか?



18世紀



モーツァルト 1756-1791年



ベートーヴェン 1770-1827年

19世紀



ベルリオーズ 1803-1869年



メンデルスゾーン 1809-1847年



ブラームス 1833-1897年



ドヴォルジャーク 1841-1904年



フォーレ 1845-1924年

20世紀



デュリュフレ 1902-1986年



ブリテン 1913-1976年

15~16世紀



ジョスカン・デ・プレ 1450/1455年? - 1521年

16世紀

宗教改革



パレストリーナ 1525? - 1594年

17世紀



モンテヴェルディ 1567-1643年



パーセル 1659-1695年



ヘンデル 1685-1759年



J.S. バッハ 1685-1750年



D. スカルラッティ 1685-1757年

生と死を見つめて

宗教音楽は必然的に生と死の世界に入っていく。モーツァルト自身の死と絡んだ《レクイエム》だけでなく、ヴェルディの《レクイエム》も、バッハの《マタイ受難曲》も直接「死」を扱い、ブラームスの《ドイツ・

レクイエム》は残された者への慰めを、ドヴォルジャークの《スターバト・マリエル》は子を失った母の悲しみを歌う。フォーレやデュリュフレの《レクイエム》は死後の平安な世界に思いを馳せる。プリテンの《戦争レクイエム》はラテン語の典拠文に英語の戦争詩を交えて、今を生きる我々に生々しく戦争の意味を問う、正に現代の作品だ。

人間が避けて通れない「生と死」の問題を正面から取り上げる宗教音楽は、キリスト教の枠だけにとどまらず、世界の聴衆の心に訴えるジャンルなのである。

History of Religious music

中世のグレゴリオ聖歌からルネサンスへ

宗教音楽の中で、特別の位置を占めるのがグレゴリオ聖歌だ。中世6〜7世紀の教皇グレゴリウス1世のころ「聖歌集」としてまとめられたもので、単旋律のシンプルな歌だが、膨大な数の曲があるだけでなく、聖歌そのものもクラシックのレパートリーの中に現れる。

ベルリオーズ《幻想交響曲》第5楽章「サバトの夜の夢」で、金管が「ファ・ミ・ファ・レ・ミ・ド・レ・レ」とハ短調で奏でる不気味な旋律はグレゴリオ聖歌《レクイエム》の「デイエス・イレ（怒りの日）」であり、レスピーギ《ローマの松》のアッピア街道の場面で朗々と流れるのも「サンクトゥス（聖なるかな）」である。

バロックから古典派へ

17世紀を迎えフイレンツェでオペラが生まれると、教会音楽もバロック時代に突入する。モンテヴェルディ《聖母マリアの夕べの祈り》では、多様な器楽の上で声楽のソリストや合唱が壮大な音世界を繰り広げる。オーケストラや器楽合奏の上で声楽が歌うスタイルは、実はオペラと同じもの。宗教音楽には合唱も入り、より壮麗な音響世界が作られていく。

宗教改革と宗教音楽

宗教改革を経てルター派はカトリックから独立し、聖書を通じて個人が直接神と向き合おうとする姿勢をとった。音楽でも限られた人しかわからないラテン語の聖歌ではなく、自分たちにわかるドイツ語の讃美歌「コラール」を推奨した。プロテスタント諸派の中には、壮麗な教会音楽を否定するものも少なくなかったが、しかしルター派はイタリア起源の「器楽+声楽」の音響世界を引き継いだ。これがJ・S・バッハの受難曲や教会カンタータの世界へとつながっていく。

イギリス国教会はカトリックの要素も多く引き継いだ。アンセム」という独自の英語の宗教音楽も生んでいる。パーセルの作品が秀逸だ。

教会からコンサート・ホールへ

時代を遡ってバロック初期のイタリアでは、オペラと並んで宗教的な劇作品「オラトリオ」も誕生した。イタリアでは数人の歌い手が劇仕立てで歌う小規模なものが多かったが、これにドイツやイギリスで伝統のある合唱を加えて大規模なジャンルに生まれ変わったのがヘンデルだった。

ヘンデルのオラトリオは、聖書が題材でも上演はオペラと同じ劇場で行われ、商業的にも成功する。これに刺激を受けたハイドンが、ウィーンでもオラトリオ《天地創造》《四季》を作ったのは有名な話だ。

19世紀にはこうした市民合唱＆オーケストラによって、オラトリオだけでなく、以前の宗教曲も音楽市場へ躍り出た。メンデルスゾーンは眠

西洋音楽の一大ジャンル 歌い継がれた宗教音楽を聴く

文=三ヶ尻 正
Text=Tadashi Mikajiri

モーツァルトの作品で、最も知名度が高いものといえば《レクイエム》ではないだろうか？ ベートーヴェンは《第九》初演と同時に《ミサ・ソレムニス（荘厳ミサ曲）》の一部も初演している。J・S・バッハの音楽活動の中心は、毎週礼拝で演奏する教会カンタータや、復活祭前の受難曲などの教会音楽だった。ブラームスがオーケストラ作品で楽壇に認められるようになったのは交響曲でも協奏曲でもなく《ドイツ・レクイエム》だった。このように宗教音楽は西洋音楽の一大ジャンルなのだが、信仰が絡むためか、とすると近づくにいく印象を持つかもしれない。しかし、この名曲の宝庫といえる作品群を聴かない手はないだろう。

宗教音楽・教会音楽

クラシックの宗教曲・宗教音楽はキリスト教の信仰を歌う音楽だ。ただし教会での演奏用に書かれる教会音楽（ミサ曲や教会カンタータなど）と、教会以外での演奏を意図したもの（ヘンデル《メサイア》やブラームス《ドイツ・レクイエム》など）がある。

キリスト教と音楽

キリスト教は早くから音楽と深く結びついていた。新約聖書にはイエス・キリストと弟子たちが「賛美を歌ってからオリブ山に出かけた」（マタイ伝）とあり、初期キリスト教時代から歌が信仰生活の大きな要素だったことがわかる。それ以前の旧約聖書でも、たとえば「詩篇」の歌の多くは、古代イスラエルの英雄で、聖王と歌の名手だったダヴィデ王が作ったと書かれている（実際は多くの作者による）。

中世のグレゴリオ聖歌からルネサンスへ

宗教音楽の中で、特別の位置を占めるのがグレゴリオ聖歌だ。中世6〜7世紀の教皇グレゴリウス1世のころ「聖歌集」としてまとめられたもので、単旋律のシンプルな歌だが、膨大な数の曲があるだけでなく、聖歌そのものもクラシックのレパートリーの中に現れる。

教会カンタータ

バロック期のルター派教会では毎週、声楽・器楽により信仰を歌う教会カンタータが演奏されていた。町の大きさにより規模はさまざまだが、ライプツィヒやハンプルクなどの大都市では大きな合唱・合奏を伴うものも少なくなかった。

J.S. バッハが作曲した約200曲の教会カンタータが有名だが、テレマンやバッヘルベルなどの秀作も紹介されている。

なおJ.S. バッハには《結婚カンタータ》や《コーヒー・カンタータ》、《農民カンタータ》などの「世俗カンタータ」もある。イタリアのカンタータは聖俗ともにソロの曲が多い。

受難曲

春の受難節に「最後の晩餐」や「ピラトの審判」、「十字架刑」の様子などイエス・キリストが受難するまでを音楽劇として演奏する。

聖書を中心にしたJ.S. バッハの《マタイ受難曲》《ヨハネ受難曲》が有名だが、ほかにも古くはシュッツの受難曲やテレマンの作品、聖書ではなく自由詩による《ブロッケス受難曲》(ヘンデル、テレマン等) などもある。

モテット

古いフランス語の「Mot, モ (ことば)」が語源。ルネサンスのモテットは自由詩による宗教曲。フランスでは管弦楽付きの《グラン・モテ》、オルガン伴奏のみの《プチ・モテ》などが生まれた。ルター派ではJ.S. バッハのモテットが有名で、他のJ.S. バッハ作品が忘れられていた間も葬儀用として歌い継がれていた。



マニフィカト

聖母マリアが神の子を身ごもった喜びを歌う賛歌。これも聖務日課のうち日没時の「晩課」で歌われる。

バロック初期のモンテヴェルディ《聖母マリアの夕べの祈り》、J.S. バッハのものが有名だが、現代のイギリスの作曲家ラターの作品も広く歌われている。

オラトリオ

オペラ同様、声楽とオーケストラで演奏する劇音楽だが、演技や舞台衣裳・装置を使わず、演奏会形式で上演するジャンル。

オラトリオとは「礼拝堂」を意味し、もとは信者が宗教体験を語り合う集いを礼拝堂で開いていたが、その前後の歌が発展して、前後2部の劇音楽となった。初期の傑作にカリッシミの《イエフタ》がある。

オラトリオは17世紀に「イタリア語(またはラテン語)、カトリック、題材は聖書や聖人伝、歌手数人と室内合奏、2部構成」の形で成長したが、ヘンデルが《メサイア》などで「英語、プロテスタント(または世俗)の題材、独唱・合唱・オーケストラ、3部構成の劇音楽」として生まれ変わらせた。ハイドン《天地創造》やメンデルスゾーン《エリヤ》などもこの流れにある。

コラール

カトリックの聖歌はラテン語なので、限られた人にしかわからないが、ルター派は自分たちがわかる言葉で信仰を歌う「コラール」(Choral, 讃美歌)を推奨した。コラールはそれだけで歌われるほか、カンタータや受難曲の素材にもなった。

イギリスの讃美歌は一般に「Hymn, ヒム」だが、クリスマスのは「Carol, キャロル」と呼ばれている。

レクイエム(死者のためのミサ)

ミサのうち、葬儀や11月2日の「死者の祝日」に行うものを、その固有文の式文の冒頭をとって「レクイエム」と呼ぶ。レクイエムでは、典礼の性格上通常文の「グローリア」(神の栄光を讃える章)や「クレド」(信仰告白の章)は省略される。逆に固有文で作曲される箇所が多い。

かつて典礼文の中にあった「ディエス・イレ(怒りの日)」の恐ろしい「最後の審判」をどう描くかが聴きどころの一つ。モーツァルトやヴェルディのものが有名だ。フォーレはこれを含めず、逆に死者の天国入りを願う「イン・パラディスム(楽園に)」を加えて平穏な曲とし、デュリュフレなどが追随している。

なおブラームス《ドイツ・レクイエム》は典礼用のラテン語ではなく、ドイツ語で歌われる。

スターバト・マーテル

「母は立っていた」を意味するラテン語で、十字架の下で聖母マリアに祈る歌。中世の修道士ヤコボネの作詩と伝えられる。マリア崇敬の中で人気を集め、数々の音楽家が作曲してきた。悲痛な内容が3行×20段落も続いたため、ともすると単調になりかねないが、逆にそれをいかに多様に曲付けするかが作曲家の腕の見せどころとなった。

ベルゴレージのものが有名だが、ルネサンスにも多くの作品があり、後のハイドンやロッシニ、ドヴォルジャーク、ブーランクなども名作を残している。

テ・デウム

〈神よ、あなたを讃えます〉で始まる賛歌。4世紀のミラノ司教、聖アンブロジウスが弟子の聖アウグスティヌスに洗礼を施す際に即興で作ったと言われている。

ミサと並ぶ典礼の聖務日課のうち「朝課」で主日祝日に歌われるが、戦勝記念などの祝賀行事用の大規模な曲も多い。古くはフランスのシャルパンティエ、新しくはブルックナーの作品が特に有名。

Religious music genre list

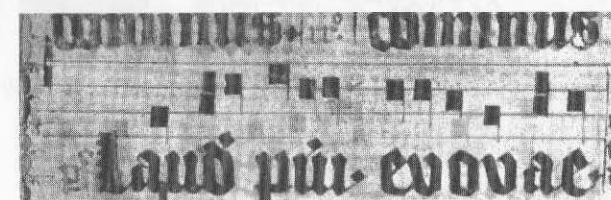
「宗教音楽」特徴まるわかり一覧

文=三ヶ尻正
Text=Tadashi Mikajiri

宗教音楽にはミサ曲やレクイエムなどさまざまな曲種がある。ただそれぞれがどんな内容でどんな機会に演奏されるものかはあまり知られていないかもしれない。ここでは代表的な曲種を紹介しておこう。

グレゴリオ聖歌

カトリックで最重要とされる単旋律の聖歌。ネウマ譜(4線譜+四角の音符)の形で定着している。中世の教皇グレゴリウス1世のもとで編纂されたものがベース。今でも歌われるほか、宗教曲の主題としても使われる。



16世紀のネウマ譜

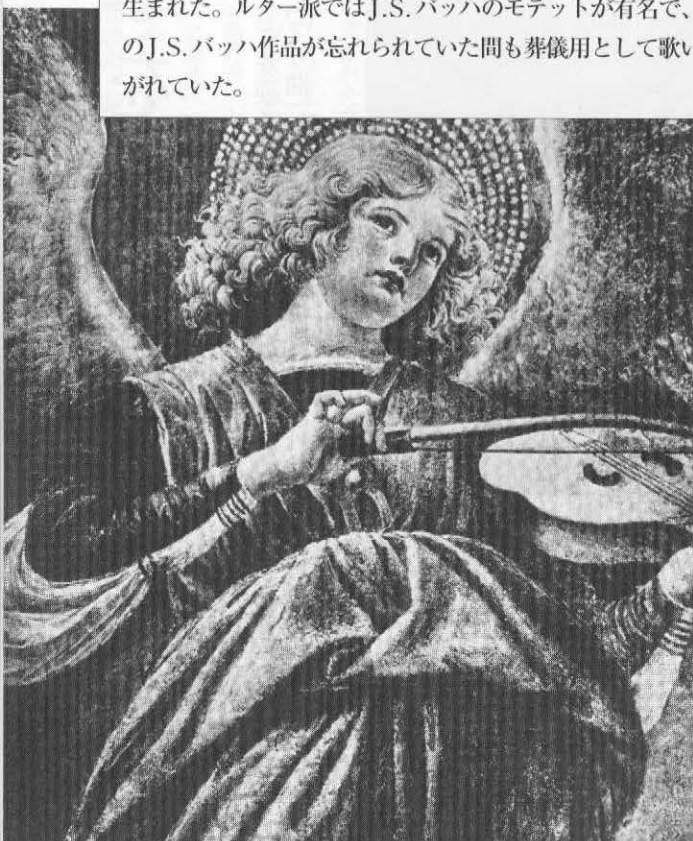
ミサ曲

最後の晩餐でイエス・キリストが、自分の体と血としてパンとワインを弟子たちに分け与え、ずっとその儀式を行うよう命じたのがミサの起源。

ミサの式文にはどの日も変わらない「通常文」と、それぞれの日に特有の「固有文」がある。通常文のうち「キリエ」「グローリア」「クレド」「サンクトゥス」「アニュス・デイ」の5章(「サンクトゥス」後半の「ベネディクトゥス」を分けて6章にすることもある)に作曲したものがミサ曲である。

ルネサンス期にポリフォニー・無伴奏合唱で多数の名作が生まれたが、バロック・古典派以降はオーケストラ付きの作品が主流となった。

J.S. バッハ《ロ短調ミサ》やハイドン《テレジア・ミサ》、モーツァルト《ハ短調ミサ》、ベートーヴェン《ミサ・ソレムニス》などが有名。基本ラテン語だが、古いスラヴ語のヤナーチェク《グラゴル・ミサ》など各国語の作品もある。



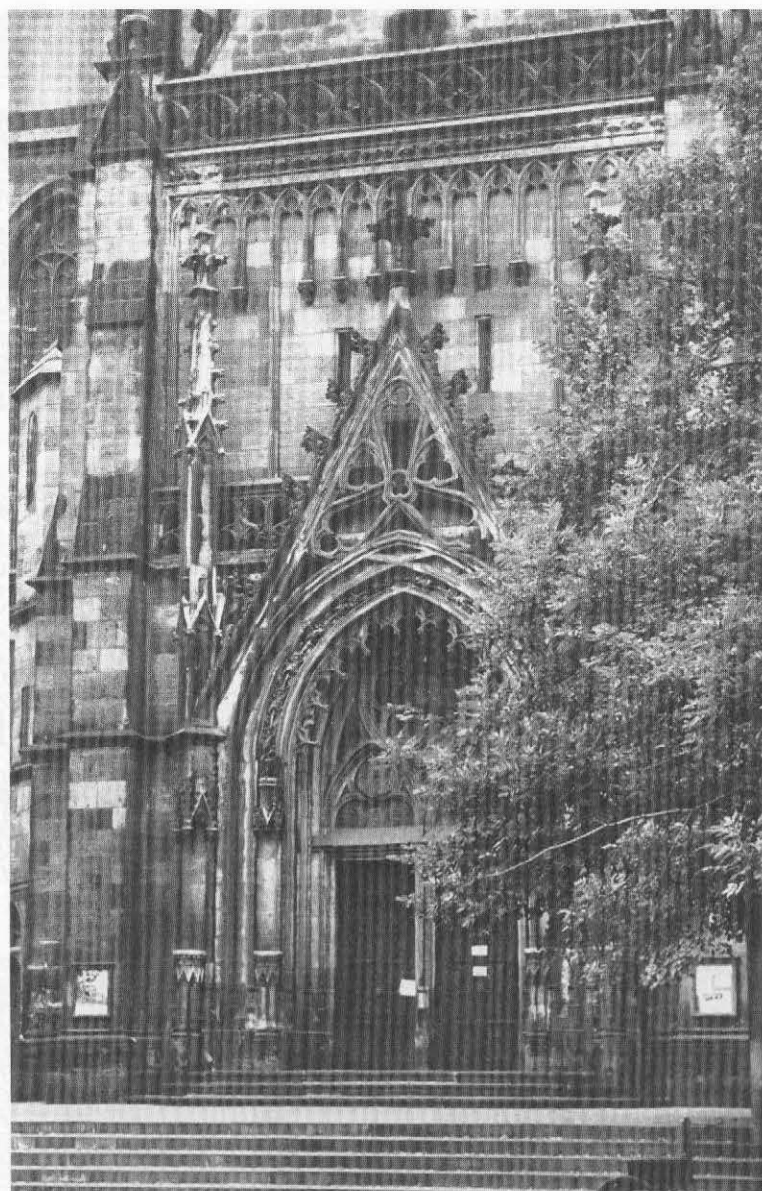
聴きどころ Point

①第3曲「クレド」

「ニケア信経」(=「クレド」)は、「信仰告白」というミサ曲のなかでも肝要な部分であることもあり、全曲中もっとも新作(転用でない曲)が多く、書法も精緻で評価が高い。

②第8曲「コンフィテオール(私は認める)」

なかでももっとも凝った音楽で、フーガやカノンなどJ.S.バッハが到達した対位法的声楽の精髓が聴ける。



晩年の27年間務めた任地、ライプツィヒにあるトーマス教会



今年9月8日に行われたトン・コープマン(指揮)とアムステルダム・バロック管弦楽団&合唱団《口短調ミサ》公演(すみだトリフォニーホール) ©三浦興一

やアリアを導入する際に用いられるレチタティーヴォもない。受難曲のようなドラマはないが、その分音楽として自立している。聖書物語の解釈である《マタイ受難曲》や《ヨハネ受難曲》より、音楽として抽象性が高いのである。また各曲も均整のとれたものとなっており、全体の構成もシムメトリカルだ。例えて言えば、大粒の真珠のような一曲一曲が連なった見事なネックレスのような印象を与える作品なのである。

歌い継がれる魅力とは?

どの曲も素晴らしいが、ここでは全曲

の核心とされる「ニケア信経(クレド)」の中央に置かれた3曲に注目してみたい。(聖書によりて)はマリヤの処女懐胎を、(十字架にかけられ)はイエス・キリストの磔刑を、そして(3日目に甦りたま)はイエス・キリストの復活をあらわす。(聖書によりて)は全曲の最後、つまり1749年に書かれた曲で、(十字架につけられ)は1712年に書かれた「カンタータ第12番」の第2曲の転用で、全曲中もっとも古い曲だが、本作のために補筆されており、2曲並べて違和感がないことに驚かされる。ともに対位法的な古い様式による楽曲だ。続く(3日目に

甦りたま)では、新しい形式であるター・カボ様式により喜びが爆発するが、これは消失した《世俗カンタータ》BWV Anh. 9からの転用と考えられている。このような新旧の音楽のダイナミックなコントラストは、本作の大きな魅力だ。また「第6曲」の《感謝し奉る》と、全曲を締めくくる《神よ平和を与え給え》には同じ音楽が使われ、見事な統一感とカタルシスをもたらす。

「神よ平和を与えたまえ。当時も今も、これほど切実に願われている言葉はないだろう。これもまた、信仰のひとでもあったバッハの遺言なのかもしれない。

宗教音楽
2大ジャンル
①

J・S・バッハ《口短調ミサ》を聴く

文 加藤浩子
Text 三浦興一

ミサ曲のジャンルを代表する1曲としてまず、今年生誕333年を迎えたJ・S・バッハの《ミサ曲》口短調(通称「口短調ミサ」)を紹介。生涯宗教音楽に向き合い続けたバッハの「ミサ曲」は今もなお多くの人に愛され続けている。

謎がつきまとう作曲の経緯

《口短調ミサ》は、J・S・バッハ(1685-1750、以下バッハと表記)が生前に唯一完成させた「完全ミサ曲」(ミサ通常文のすべてを作曲)であり、彼の宗教音楽の集大成的な性格を持つ大作である。また、バッハが最後に「完成」させた大曲であることも重要な点。

ルター派教会の音楽家であるバッハにとって、カトリック教会の礼拝音楽である「ミサ曲」を作曲する義務はない。そのため《口短調ミサ》には、謎めいた部分がつきまとう。何より、作曲された目的がわからないのだ。イエス・キリストの受難を追悼する聖金曜日の礼拝のために書かれた受難曲や、特定の祝日のために書かれたカンタータとはそこが違う。ミサ曲の最初の2曲である「キリエ」と「グロリア」からなる《短ミサ》ならルター派の礼拝で演奏されることもあったし、バッハ自身BWV 233など数曲の《短ミサ》を残しているが、通作ミサを作曲しても上演の場はないのである。実際《口短調ミサ》はバッハの生前に一度も演奏されていない。

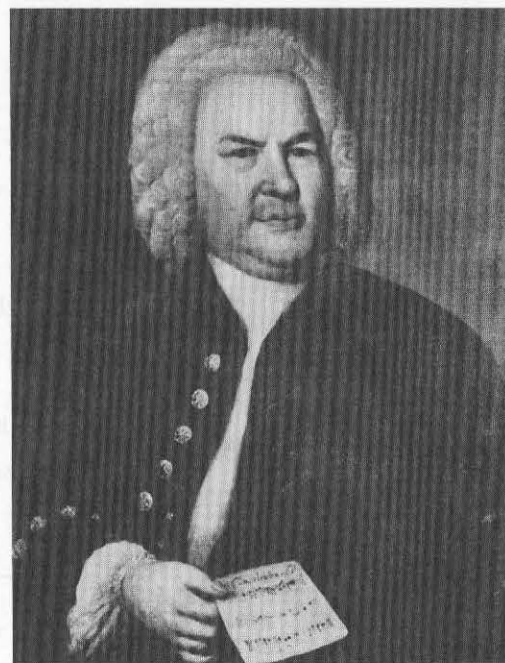
だが近年では《口短調ミサ》は、バッハが自身の教会音楽の集大成を試みた作品であると捉えられている。また、ミサ曲という形式を選んだのも、特定の祝日にしか上演できない。時季ものであるカンタータや受難曲より普遍的な形式だからではないかというのである。たしかに「ミサ曲」なら1年中演奏できる。たとえば、毎年6月に開催されるライプツィヒのバッハ・フェスティバルのファイナルコンサートは《口短調ミサ》と決まっている(演奏家は毎年変わる)。声楽作品の大作なら《口短調ミサ》より《マタイ受難曲》ではないかと思う方もあるだろうが、6月に受難曲を演奏するのは「時季外れ」なのである。

作曲家人生の集大成となった《ミサ曲》

《口短調ミサ》は、1733年にドレスデン宮廷に献呈された「キリエ」と「グロリア」からなる《ミサ曲》(バッハ自身がつけたタイトル)から始まった。バッハはそのころ市参事会との軋轢を抱えており、交渉を優位に運ぶためにドレスデンのザクセン選帝侯の宮廷作曲家の称号

を望んだのである。カンタータでなくミサ曲が献呈されたのは、カトリックの国ポーランドを併合した際、選帝侯の宮廷がルター派からカトリックに改宗していたためだった。この《ミサ曲》は、献呈に先立ってドレスデンで上演された可能性がある。

だがバッハは晩年、本作に「クレド」「サンクトゥス」「アニュス・デイ」を含む通作ミサのテキストに作曲したものをも足して、完全な《ミサ曲》を創り上げた(全曲をドレスデンで上演されることを視野に入れていたとする説もあるが、確証はない)。その多くは旧作のカンター



J.S.バッハの肖像画

J.S. Bach
Mass in B minor

タからの転用だが、その結果作曲時期がほぼ35年にわたる、まさにバッハの作曲家人生の集大成ができた。音楽的にも、合唱フーガやパッサカリアのような対位法的な古い様式から、当時の流行である華やかな装飾がちりばめられたアリア、優雅なギャラント様式による重唱など、彼が手がけた新旧のスタイルが網羅されている。何より、合唱音楽の多彩さはバッハの作品の中でも比類がない。《マタイ受難曲》が多彩なアリアを誇るのとは対照的だ。また《ミサ曲》という形式上、ルター派の礼拝音楽につきもののコラール(賛美歌)はないし、語りの部分



シューベルト『ミサ曲』～テキストの欠落の謎～

シューベルトのミサ曲では、全6曲にわたり特に信仰告白の書「クレド」の章で一部、詩句の削除が行われている。くそして一にして聖なる、公の使徒継承の教会を」の詩句がミサ曲6曲すべてにおいて削除され、同じく「クレド」のくよみがえりを待ち望む」の箇所は「第1番」「第5番」「第6番」において削除されている。削除は「クレド」だけではなく、「グローリア」でもく世の罪を除き給もう主よ」の詩句が、全6曲にわたって削除され、「サンクトゥス」や「アニヌス・デイ」でも削除がある。シューベルトがミサ曲全6曲で同じ詩句を省略しているのは偶然ではなく、意図的である。その背景として当時のカトリック教会の改革主義の思潮と結びつけた解釈もあるが、これらのミサ曲は典礼で演奏することを前提として作曲されていることに鑑みると、この削除は大きな謎である。シューベルトは宮廷楽長のサリエリに師事しており、サリエリはシューベルトの作曲したミサ曲におけるテキストの欠落はわかっていないに違いない。また、ミサ曲は、少年シューベルトを指導したミヒャエル・ホルツァーがレーゲンス・コリ（合唱長）を務めるリヒテンタール教会でしばしば演奏されており、ホルツァーがテキストの欠落に気が付かないとは考えられない。おそらく19世紀前期のウィーンではミサ曲のテキストの削除が慣行として行われていた可能性があるのではないだろうか。

「サンクトゥス」
「聖なるかな」を3回繰り返して歌う「サンクトゥス」では、このテキストを反映して、天国の世界を描いた透明な楽想で表現されることが多い。前述の詩句に続いて「主の栄光は天地に満つ」というたわれ、主の栄光が讃えられる。この「聖体拝領」の儀式で、会衆はパンとぶどう酒を拝領することでイエス・キリストの肉体と血に変わるとされる。このサンクトゥスは間に短い「ベネディクトゥス」。「ほむべきかな、主の名によりて来る者」が入る。「サンクトゥス」の終わりの詩句「天のいと高きところにつつホザンナ」に挟まれるかたちで歌われ「サンクトゥス」と一体になっているが、作曲家によってはこのベネディクトゥスを独立した楽章として作曲している作品も多い。

「ホザンナ」はヘブライ語で「いま救い給え」を意味し、「詩編第118」25」に基づいている。「詩編118番」25」はこのように語っている。「主よどうぞわれらをお救いください。主よどうぞわれらを榮えさせてください」。



アンドレア・デル・ヴェロッキオと弟子たちによる『キリストの洗礼』。旧約聖書「ノアの箱舟」でも登場する「鳩」は精霊を象徴している

Explanatory notes of a text

それを繰り返して、最後の「ヤ」の語を長くメリスマ（一つの音節に多くの音をあてがう歌唱の仕方）を言う」で引き延ばし、華麗な表現が行われる。

宗教作品には「セクウェンツィア」と呼ばれるジャンルがある。これは「アレルヤ」の旋律に自由に歌詞をあてがって作られたのがその起源で、聖体祭の祝日には「アレルヤ」の前に歌われる。有名な《スターバト・マーテル（悲しみの聖母）》や《ラウダ・シオン》、《レクイエム》で歌われる「デイエス・イレ（怒りの日）」なども「セクウェンツィア」の一つである。

固有文について

ミサ「固有文」のなかで音楽的に重きをなすのが「アレルヤ」である。「主を賛美せよ」を意味するヘブライ語を語源とするこのアレルヤでは、独唱あるいは複数の独唱者がアレルヤを歌うと、合唱が

ミサ曲は決まったテキストに基づいて作曲されている。作曲家は同じ歌詞をどう解釈しどう表現しているのか……それぞれのこだわりを発見するのにも《ミサ曲》を聴く醍醐味の一つ。こちらではミサ曲のテキストのながれ、特徴など、演奏をより味わって聴くための解説をお届けする。

ミサ曲のながれ

第一部

ミサは大きく3つに分かれている（左図参照）。最初が「序」あるいは「開祭」と呼ばれる部分で、しばしば入祭唱の「イントロイトゥス」が置かれ、ミサ曲で主に歌われる通常文の「キリエ」と「グローリア」が続く。（ミサ曲ではこの「キリエ」と「グローリア」のみの構成を「ミサ・ブ

ミサ曲・テキストの構成

	固有文	通常文
第一部 (序、開祭)	イントロイトゥス	キリエ グローリア
第二部 (言葉の典礼)	グラドゥアーレ アレルヤ セクウェンツィア	クレド
第三部 (聖餐の典礼)	オッフエルトリウム コムニオ	サンクトゥス・ベネディクトゥス アニヌス・デイ イテ・ミサ・エスト

ミサ曲は通常文と固有文という二つの種類からなっている。通常文は、「キリエ」、「グローリア」、「クレド」、「サンクトゥス」、「ベネディクトゥス」、「アニヌス・デイ」という構成で主に作曲家が曲を付ける部分である。この通常文に、儀式の内容に応じて固有文といわれる、「イントロイトゥス」や「オッフエルトリウム」などが加わり、それぞれの祝日や祭日に応じて取り上げられる。これらは教会でのミサの儀式の内容と密接に結びついている。（通常文と固有文については64ページ「ミサ曲」を参照）



神の子羊

「レヴィス」と呼ぶこともある）
「キリエ」はギリシア語による「キリエ・エレイソン（主よ、お憐れみください）」、「クリステ・エレイソン（キリストよ、お憐れみください）」、そしてふたたび「キリエ・エレイソン」が唱えられ、それぞれの祈りの言葉が3回繰り返される。「キリエ」はこの語の抑揚にあわせて、長短長のリズムで歌われるものが多く、J・S・バッハ

「グローリア」
続く「グローリア」は、「天のいと高きところには神の栄光、地には善意の人に平和あれ」と祈願される。ミサ曲の「グローリア」では神の栄光を表現するために、下から駆け上がるようなパッセージで表現されることが多い。たとえばシューベルト《ミサ曲第6番》の「グローリア」はその例である。

第二部

この「グローリア」は待降節（キリストの誕生を待ち望む期間）と四旬節（復活祭の前の40日間）では省かれる。「グローリア」では「全能の神なる父、神の御子なるイエス・キリスト、主なる御神、小羊、父の御子」が讃えられるが「子羊」は、神への従順の象徴で、イエス・キリストを表して

続いて第三部というべき「聖餐の典礼」に入る。ぶどう酒（ワイン）とパンの聖餐の儀式が行われるこの部では冒頭、「オッフエルトリウム（奉獻唱）」が歌われる。この儀式は「最後の晩餐」の再現の意味をもつ。「オッフエルトリウム」の歌唱のち、「サンクトゥス」と「アニヌス・デイ」が続く。

《口短調ミサ》やベートーヴェン《ミサ・ソレムニス》の「キリエ」もこのリズムで歌われる。

第三部

ミサの第二部は「言葉の典礼」と呼ばれ、「書簡朗読」や「アレルヤ」、「セクウェンツィア」、「福音書朗読」が行われ、「クレド」が歌われる。この「クレド」は、プロテスタントでは「ニケア信経」と呼ばれる。

「クレド」

「クレド」では「われは信ず、唯一の神」という詩句で開始。マリアの受胎、イエス・キリストの誕生、ポンテオ・ピラトのもとでの受難、埋葬、復活が語られ、死者のよみがえりと来世の生命への待望で締めくくられる。

音楽評論家
佐伯茂樹
が選ぶ

おすすめ《ミサ曲》3選
モーツァルト《ミサ曲ハ短調》、ベートーヴェン《ミサ・ソレムニス》、シューベルト《ミサ曲第6番》
文：佐伯茂樹
Text: Shigeo Aoki

数多くのミサ曲が残されている中で、「どのミサ曲を聴こう?」と迷っている方にぜひおすすめしたい作品を音楽評論家の佐伯茂樹氏に選んでいただいた。おなじみの作曲家の《ミサ曲》で、交響曲やピアノ曲などとは一味違った味わいに触れてみてはいかが?

モーツァルト《ミサ曲》ハ短調K427

モーツァルト(1756-91)が、故郷ザルツブルクを離れてウィーンに移住してから書いたミサ曲。モーツァルトは、ザルツブルク時代に実際のミサのためにミサ曲を15曲(他に偽作もある)作曲しているが、この曲は、誰に頼まれたわけではなく、自発的に作曲されている。モーツァルトは、コンスタンツェとの結婚をザルツブルクにいる父親に認めてもらうためにこの曲を披露しようと計画したのだ。結局、規模が大きくなり、全ての曲が完成される前に初演した。現在でも「アニウス・デイ」を欠いた状態で未完成のままである。

しかし、残された曲はいずれも充実した内容を持っているので、現在では一部補筆した楽譜で演奏されており、「レクイエム」に次いで高い人気を誇っている。なかでも、ソプラノ歌手であったコンスタンツェが歌うことを想定して書かれた「キリエ」のソプラノ独唱は、この曲の最大限の見せ場になっておりメランコリックな美しさが光る。

《レクイエム》よりもモーツァルト自身が書いた部分が圧倒的に多いので、モーツァルト本来のミサ曲のスタイルを知るためにも聴いておくことをお勧めする。



モーツァルトの妻、コンスタンツェ

Recommended
Mass

ベートーヴェン《ミサ・ソレムニス》ニ長調Op.123

ベートーヴェン(1770-1827)が晩年に書いたミサ曲の傑作。「交響曲第9番」(以下、《第九》)と同時期に作曲され、ウィーンにおける《第九》の初演では、「ミサ・ソレムニス」の「キリエ」「クレド」「アニウス・デイ」の3曲も同時に紹介された。

当時、ミサ曲は教会で演奏するものと決められており、ベートーヴェンは、検閲

による演奏禁止を恐れて、ミサ曲というタイトルを「大讃歌」に変更した。

このエピソードが示しているように、ベートーヴェンは「教会儀式」としてではなく、《第九》と同じように一般の聴衆に向けて創作したことがわかる。彼自身「最大で最も完成された作品」と語っており、大変な自信作だったようだ。

自筆譜の「キリエ」冒頭には、「心よ

聴きどころ Point

第2曲「グローリア」第6部のフーガ

合唱と管弦楽による壮大なフーガが展開され、やがて独唱陣も加わる。ベートーヴェンが《第九》で表現しようとしたものが、さらに深く広がりを持って展開されているので、聴いていて興奮を禁じ得ない。最後の転調もスリリングだ。



ベートーヴェンの有名な肖像画。ベートーヴェン自らの要望で《ミサ・ソレムニス》を手記している姿が描かれている

り出で、願わくば再び心に入らんことを」と記されていることからわかるように、《ミサ・ソレムニス》という音楽は、ラテン語の典礼文をベートーヴェンなりに解釈して、音楽によるメッセージとして発信する深い内容になっている。



*「キリエ」冒頭に書かれた言葉

ミニ・コラム ウィーン少年合唱団とミサ

「天使の歌声」と呼ばれ、日本でも人気のあるウィーン少年合唱団。実は、彼らの本拠は毎日曜日にウィーンのホーフブルク王宮礼拝堂で行われるミサで歌うことなのである。ウィーン少年合唱団の創設は1498年。教会が女人禁制だった時代に、声変わりする前の少年にソプラノとアルトのパートを歌わせることが目的で設立されたので、その伝統が現在でも続いているのだ。現在は、「ハイドン」「モーツァルト」「シューベルト」「ブルックナー」とミサ曲の作曲家の名を冠した4つのグループで交代しながら活動している。同団は、昨年オーストリアの無形文化遺産に登録された。ウィーンに行ったら彼らが歌うミサ曲を聴いてみてほしいだろう。



「ブルックナー組」が教会で歌う様子。彼らは来年5・6月に演奏ツアーで来日予定!
©www.lukasbeck.com

シューベルト《ミサ曲第6番》変ホ長調D950

シューベルト(1797-1828)が亡くなる年に作曲したミサ曲。シューベルトはラテン語によるミサ曲を6曲書いており、この「第6番」が最後になる。作曲の動機は不明であり、初演は彼の死後に行われている。彼は、ラテン語による伝統的なミサ曲を書く一方で、教会での演奏が禁じられていたドイツ語による《ドイツ・ミサ曲》を作曲するなど、独自

「これも聴きたい!」まだまだある《ミサ曲》

カトリック教会の典礼で歌われる《ミサ曲》のルーツは、ラテン語による典礼文を単旋律で歌う「グレゴリオ聖歌」にある。これが多声化してミサ曲になるわけだが、最初に一人の作曲家によって書かれたのが、14世紀フランスの作曲家ギヨーム・ド・マシヨの《ノートルダム・ミサ曲》である。4声の音楽が織りなすピュアな響きが美しい。

ルネサンス期のミサ曲としては、16世

聴きどころ Point

第6曲「アニウス・デイ」の冒頭

自らの死を悟ったような晩年のシューベルトならではの深淵で悲痛な響きが心を打つ。バロック時代のようなフーガであるが、シューベルトならではの和音やシンコペーションが使われている点は興味深い。



シューベルトの生家の近くにある「リヒテンタール教会」(ウィーン)。シューベルトが生まれてすぐに洗礼を受けた教会であり、彼の上演で教会作品が多く演奏された

でいった複雑で立体的な響きが圧巻である。

古典派時代のミサ曲と比べると、やはりハイドンとモーツァルトのミサ曲は欠かすことができない。ハイドンは13曲のミサ曲が現存しており、どれも個性豊かで聴いて楽しいが、最後のミサ曲になった《ハルモニ・ミサ》をお勧めしよう。《ハルモニ》というタイトルのとおり、木管楽器が充実し、楽器編成を規制していた教会の権力

が弱まったことを示している。

ロマン派時代になると、教会側が派手なオーケストレーションを禁じたこともあって、ミサ曲を書く作曲家は減ってしまった。そのような中で、敬虔なカトリック信徒だったブルックナーは、ミサ曲を5曲作曲している。とりわけ、合唱と管楽合奏のために書かれた《ミサ曲第2番》のユニークな響きはぜひ聴いてほしいだろう。

Painting and music depicting Jesus Christ

聖書の「福音書」では、誕生後のイエスがどのように成長していったのかについての記述は少ない。「ルカ福音書」には5歳から12歳までのイエスの成長が記され、知性あふれる聡明な少年であったことが語られている。しかし、イエスが成長の過程でどのような宗教に目覚め、人々の救済の思想を育んでいったのかについては詳しく語られていない。

少年イエス

J・S・バッハ《クリスマス・オラトリオ》第1部のはか、ヒンデミット《マリアの生涯》第7曲《イエス・キリストの誕生》、フランスの近代作曲家プーランクの《クリスマス》のための4つのモテット》第4曲《今日ぞキリストは生まれぬ》、さらにメシアン《オルガン作品》《主の降誕》第1曲《聖母とみどり児》がある。ショパン《スケルツォ》第1番《聖母とみどり児》がある。そのほか数多くのクリスマス・キャロルもこれらイエスの誕生の祝歌である。

二人のマリア ～ベタニアのマリアとマグダラのマリア～

聖書には聖母マリアのほかにさまざまなマリアが登場する。そのなかで絵画の対象となっているのは、ベタニアのマリアとマグダラのマリアである。

イエスがマリアの家を訪れたとき、マリアはイエスの言葉に深く聴き入り、そしてイエスの足に高価な香油をそそぎ、それを自身の髪の毛で拭いた。



画：ヨハネス・フェルメール (1632-75年)『マルタとマリアの家のキリスト』

ベタニアのマリア
フェルメールの画ではベタニアのマリアがイエスの言葉に耳を傾けている情景が描かれている。絵画ではマリアが長い髪の毛でイエスの足を拭く情景を描いている構図も多い。

ベタニアのマリアはJ.S.バッハ《マタイ受難曲》のなかで登場するが、このマリアを題材とした主な作品はない。

マグダラのマリア
イエスに思いを寄せ、処刑、そしてその後墓に寄り添い、イエスの復活を見届けたのがこのマグダラのマリア。娼婦とされるが、もっとも人間的な愛を表明した女性。



画：エル・グレコ (1541-1614年)『悔悛するマグダラのマリア』

長い髪の毛が特徴で、しばしば骸骨とともに描かれる。マグダラのマリアを描いた絵画は多い。

エル・グレコ「マグダラのマリア」は長い髪の毛をたらし、左に髑髏が描かれている。

アントニオ・ベルターリ「オラトリオ《ラ・マッダレーナ》」や、ルイージ・ロッシ《マグダラのマリアの嘆き》、山田耕祐「舞踊交響曲《マグダラのマリア》」などの作品がある。

イエスの誕生 (降誕)

ヨセフとマリアは故郷ベツレヘムに向かう。しかし、宿泊できる宿を見つけられないとき、マリアは月が満ちて、やむなく家畜小屋で出産し、イエスを飼料の葉おけに寝かせる。このイエスの生誕がクリスマスの祝日。

イエスの誕生を描いた絵画では、牛や馬、ロバ、羊などさまざまな動物が描かれている。

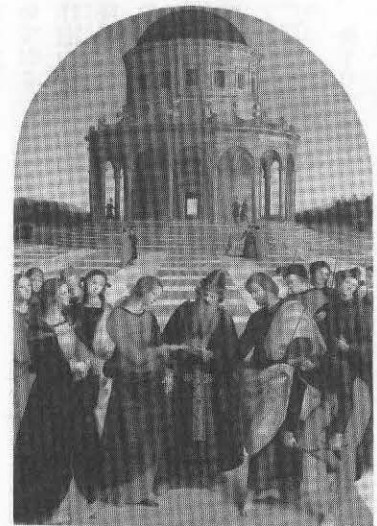


画：ヘラルト・ファン・ホントホルスト (1592-1656年)『キリスト降誕図』

絵画と音楽でたどるイエス・キリスト

文＝西原稔
Text＝Minoru Nishihara

作曲家が宗教音楽を作曲したように、多くの画家が宗教絵画を描いている。ここでは、イエス・キリストに触発されて生み出された絵画と音楽を通して、誕生から復活までの場面をたどっていく。



画：ラファエロ・サンティ (1483-1520年)『聖母の婚礼』

マリアの婚礼

イエス・キリスト（以下、イエス）の生涯は、マリアとヨセフの婚礼に始まる。マリアは14歳の時に、「杖の先に花が咲いた独身者を夫とせよ」という天使のお告げを受け、大工のヨセフが選ばれた。

中央に立つのが司祭長で、婚約の指輪をはめようとしている。ラファエロのこの絵画は透明で均整の取れた色調、すがすがしいまでの気品が感じられる。この絵画ではヨセフは若い男性で描かれているが、イエスの誕生では老人で描かれることが多い。

マリアの生涯を扱った作品ではヒンデミット《マリアの生涯》やブラームス《マリアの歌》(Op.22)がある。フランク・リストのピアノ曲《巡礼の年 第2年 イタリヤ》第1曲《婚礼》は、この絵画に靈感を得て作曲されている。



画：フラ・アンジェリコ (1395?-1455年)『受胎告知』

受胎告知

聖処女マリアのもとに大天使ガブリエルが舞い降り、精霊によって受胎したことを告げる。

上の絵はフラ・アンジェリコの『受胎告知』でマリアに向かって大天使ガブリエルの光線が降り注いでいる。多くのマリア像では驚きのあまり、身を背けて描かれる。

パレストリーナ「ミサ曲集第1巻」《大天使ガブリエル》、ヒンデミット《マリアの生涯》第2曲《マリアの受胎告知の日》。フランス近代の作曲家ミヨーのクロード・ド・ベルグの劇のための音楽《マリアへの受胎告知》(作品117)などの作品や、《アヴェ・マリア》はこの場面を扱っている。J・S・バッハ「カンタータ第147番(心と口と行いと生活で)」BWV147はイエスを身籠ったマリアの喜びが語られる。「マニフィカト」もマリア賛歌で、モンテヴェルディやJ・S・バッハなど多くの作曲家が作曲している。

場面説明
絵画の解説
場面に触発された音楽の紹介

キリストへの賛美を扱った曲

「メサイア」

「メサイア」は救世主のことで、ヘンデルの《メサイア》は全能の神を讃える音楽としてもっとも有名である。全3部からなる作品の第2部を締めくくることが「ハレルヤ」で、「ヨハネ黙示録」をテキストとしたこの作品では「王の中の王」を高らかに讃える。

「テ・デウム」

「テ・デウム」も主への賛美とキリストへの賛美が歌われる。ミサ曲と類似したテキストで、「サンクトゥス」のように「聖なるかな」の語が3回繰り返され、最後の詩節は「アニュス・デイ」のように「わたしたちを憐れんでください」と、救済と神への賛美が歌われる。ヘンデルやブルックナーの作品は有名である。



画：ジョット・ディ・ボンドーネ (1267? - 1337年) 『ユダの裏切り』の場面 (スクロヴェーニ礼拝堂のフレスコ画)



画：アントニオ・チゼーリ (1821 - 1891年) 『この人を見よ』

ピラトの裁き

イエスはローマ総督ピラトのもとでの裁判にかけられる。ピラトはイエスの無罪を認め、その妻を遣わして「イエスにはかわるな」と言わせるが、ユダヤの民の暴動を恐れてイエスの処刑を行った。

チゼーリの絵は、ユダヤの群衆にイエスを示すピラトが描かれている。

受難曲ではかならずピラトの裁きの場面が描かれる。また、ミサ曲の「クレド」に「ポンテオ・ピラトのもとにてわれらのために十字架をつけられて」と詩句がある。



画：ミケランジェロ・メリージ・ダ・カラヴァッジョ (1571 - 1610年) 『聖ペテロの否認』

ペテロの否認

最後の晩餐の折、イエスはペテロに向かって「鶏が鳴くまでに自分を知らない」と3回言う」と予言する。右端がペテロで、真ん中の女性に「これがイエスと一緒にいた」と告発される。ペテロは「イエスは知らない」と否定する。

このカラヴァッジョの絵画は告発する女性と、嘘を隠せない当惑したペテロの表情を見事にとらえている。

J・S・バッハ《マタイ受難曲》は「受難のコーラル」によってペテロの否認と失望を表現している。ペテロを描いた絵画ではアトリビュート(象徴となる事物)としてしばしば鶏が描かれる。

ユダの裏切り

ユダは銀貨30枚でイエスを密告する。ユダヤの長老たちはイエスがどのような人物であるのかを知らない。そこでユダは「自分が接吻したのがイエスである」と述べ、イエスに接吻をし、イエスは捉えられる。

初期ルネサンスの代表的な画家ジョットのこのフレスコ画では中央でユダがイエスに接吻をしている。光背が描かれているのがイエスで、騒然とした群衆の緊迫した情景が描かれる。この接吻の題材は宗教音楽を超えて用いられている。

受難曲でこの「ユダの裏切り」は重要な場面となっており、どのように音楽で表現するのかが一つの課題である。J・S・バッハ《マタイ受難曲》ではこのユダの裏切りを不協和音を巧みに用いて表現し、テキストを作詞したピカンダーはユダを「蛇」という語で表している。



画：アンドレア・マンテーニャ (1431 - 1506年) 『ゲッセマネの祈り』



画：カール・ハインリッヒ・プロッホ (1834 - 90年) 『山上の垂訓』

ゲッセマネの祈り

「ゲッセマネ」はオリブの木々のある「山麓の園」の地名を指し、イエスはここで祈りをささげる。イエスは弟子を伴ってこの山で祈りをささげるが、弟子は寝入ってしまう。

マンテーニャ画の「ゲッセマネの祈り」では右の奥にイエスを逮捕せんとユダヤの民が押し寄せているが、イエスは天に向かって祈っている。深い苦悩と身の危険にあったイエスのこの場面は聖書の中でもきわめて重い。

J・S・バッハ《マタイ受難曲》ではこのゲッセマネの祈りの場面が一つの見せ場である。ペートーヴェンの「オラトリオ・オリブ山上のキリスト」(作品85)はこの情景を劇的に表現している。

山上の垂訓

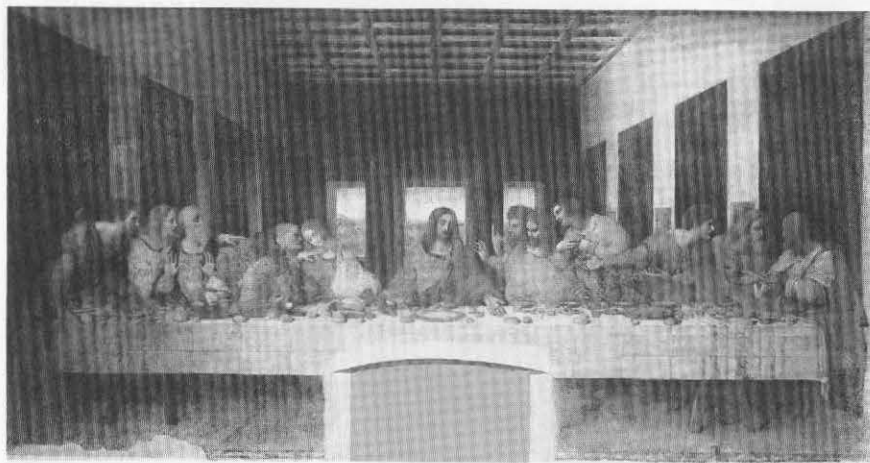
イエスは、ガリラヤ全域をまわって教を説いた。そのイエスのもとに、漁師のペテロやその弟アンデレ、ゼベタイのヤコブとその弟ヨハネがイエスに付き従い、病気で苦しむ人々も集まってきた。そこでイエスは山に登り人々に教を垂れた。

プロッホの絵画ではイエスが教を垂れている場面が描かれている。

最後の晩餐

イエスは自分を裏切るものが一人いることを語る。

これはダ・ヴィンチのもっとも有名なフレスコ画で、イエスの言葉に弟子たちがそれぞれ当惑し、騒然とした情景が3人ずつのグループで描かれている。また、この晩餐のテーブルの上の料理も注目されており、魚料理やオレングがテーブルの上の注目を集めている。見事な遠近法で描かれており、正面の窓と右側の柱が奥行きを表現するのに貢献している。



画：レオナルド・ダ・ヴィンチ (1452 - 1519年) 『最後の晩餐』

この最後の晩餐が、ミサにおける「聖体拝領」の儀式に取り入れられている。ミサ曲の「オッフエルトリウム」は聖餐式でのパンとぶどう酒(ワイン)の準備の間に歌われ、その後会衆はパンとぶどう酒を拝領し、この最後の晩餐を再現。イエスの苦しみをともにする。

「最後の晩餐」は受難曲の一場面として登場するが、この出来事自体を題材とした音楽作品はまれである。



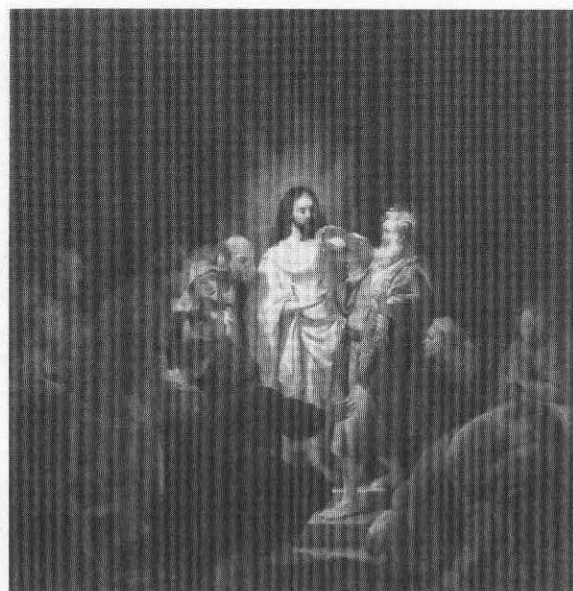
画：ピーテル・パウル・ルーベンス (1577 - 1640 年) 『聖母被昇天』

マリアの被昇天

無原罪の神の母マリアは、その生涯を閉じると天国へと引き上げられた。そのことを「被昇天」という。

多くの絵の題材に用いられ、天へと昇る聖母マリアがきわめて劇的な筆致で描かれている。ルーベンスの『聖母被昇天』では中央の青い服をまとっているのが聖母マリアである。

16世紀末から17世紀前期に活躍したマルコ・ダ・ガリアーノの『聖母マリアの被昇天のミサ』や、ヴィヴァルディ『聖母被昇天のための晩祷』などの作品が作曲された。



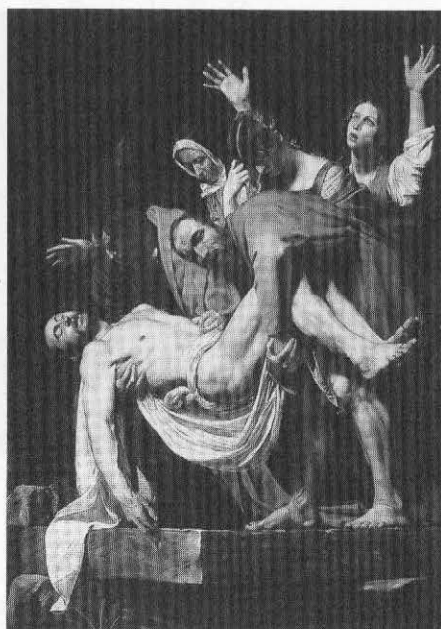
画：レンブラント・ファン・レイン (1606 - 1669 年) 『聖トマスの懐疑』

イエスの復活

死後イエスは復活し、多くの弟子の前に現れた。

レンブラントの描いた絵画は、イエスの復活に懐疑的な聖トマスを題材にしている。このモチーフは多くの画家に取り上げられており、カラヴァッジョの絵も有名である。イエスの復活を祝うのが「復活祭」である。

J・S・バッハ「カンタータ第31番『天は笑い、地は歓喜す』」はイエスの復活を賛美する音楽。同じくバッハの『復活祭オラトリオ』も代表的な作品。さらに、ヘンデル『メサイア』の〈ハレルヤ〉もこの場面をうたっている。



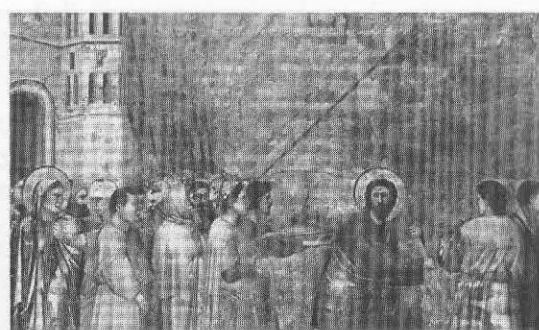
画：ミケランジェロ・メリージ・ダ・カラヴァッジョ (1571 - 1610 年) 『キリストの埋葬』

イエスの埋葬

イエスは処刑されて墓に葬られる。

イエスの埋葬は多くの画家の題材になっていた。このカラヴァッジョの絵画は、絶望と驚きが動的に描かれ、みな言葉を失っている。正面の青い頭巾をかぶった女性が聖母マリアである。右側で両手を掲げて絶望を全身で表現している若い女性はマグダラのマリアである。

「イエスの埋葬」は受難曲での重要な場面。J・S・バッハ「教会カンタータ『神の時こそいと良いとき』」は葬儀のカンタータで、「私たちはもともと良き時に神の中で死ぬ、神が望まれる時に」と歌い、父と子と精霊への賛美で締めくくる。



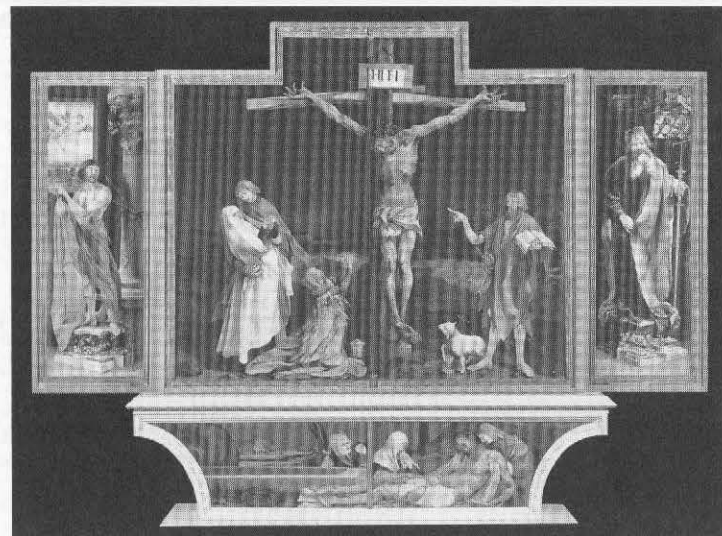
画：ジョット・ディ・ボンドーネ (1267? - 1337 年) 『十字架の道行』の場面 (スクロヴェーニ礼拝堂のフレスコ画)

十字架を担うイエス

「十字架の道行」の場面は、イエスがユダの裏切りによって捕縛され、受難を受け、そして復活するまでの物語である。

右のフレスコ画はイエスが十字架を担ってゴルゴタの丘へを向かうさまを描いている。このときイエスは力尽き十字架を担えなくなり、そこにいたクレネ人のシモンが彼を助けて担う。

「十字架の道行」の場面をフランツ・リストが『十字架への道』で描いている。作品は〈主の御旗(序奏)〉に始まり、〈第1留イエス死刑の宣告を受けたまう〉から、〈第14留イエス御墓に埋葬されたまう〉で締めくくられる。「留(Station)」は、それぞれを心に留めて祈ることを意味している。この作品の〈第5留〉でクレネのシモンが登場する。



画：マティアス・グリューネヴァルト (1470? - 1528 年) 『イーゼンハイムの祭壇画』

少年モーツァルトは、西方への大旅行の折にこの絵を見ている



画：ピーテル・パウル・ルーベンス (1577 - 1640 年) 『キリスト降架』

イエスの降架

十字架にかけられ、息絶えたイエスは十字架から降ろされる。

この場面をきわめて動的な迫力に満ちて描いたのがルーベンスの描いた『キリスト降架』である。ルーベンスはこの絵と対の『キリスト昇架』も描いており、作品は対を成している。十字架から降ろされたイエスに真っ先に駆け寄った左の青い服の女性は聖母マリアで、その右下でイエスの足を伸ばしている若い金髪の女性はマグダラのマリア。聖母マリアの上の髪を蓄えた老人は、イエスを埋葬した弟子のアリマタヤのヨセフである。

J・S・バッハの受難のカンタータ『泣き、歎き、憂い、慄き』BWV 12 は受難と神の国に入る決意が表現されている。

イエスの処刑

グリューネヴァルトの有名な祭壇画はイエスの処刑を描いている。この絵画から迫ってくるのは、痛々しさと苦しさである。これほどまでのイエスを無残に描いた画家はいないであろう。イエスの左の足元にはマグダラのマリアが身を振るように悲しみを表現している。左側には殉教者で聖者に列せられた聖セバスティアヌスが、右側には聖アントニウスが描かれている。

イエスの処刑は受難曲の中心をなす。この場面をJ・S・バッハは「カンタータ第4番『イエスは死のとりことなれり』」やサリエリが「オラトリオ『われらが主イエス・キリストの受難』」で表現している。

息子イエスを失った聖母マリアの悲しみを表現したのが、『スターバト・マーテル』である。(悲しみの母は立っていた、十字架の傍らに、涙をしつとと始まる母マリアの悲しみの音楽で、ペルゴレージやヴィヴァルディ、ドヴォルジャークなど、近代にいたるまで数々の名作が作曲されている。

宗教音楽
2大ジャンル
②

三大レクイエムを聴く

文 佐伯茂樹
Text Shigeki Sakai

「三大レクイエム」の愛称で親しまれる3作のレクイエムの曲中には映画やCMでも度々登場する印象的な旋律が登場する。ここでは、《レクイエム》のジャンルを代表する3作のレクイエムの聴きどころを通して、それぞれの魅力を紹介！

三大レクイエムの魅力はどこにある？

モーツァルト、ヴェルディ、フォーレの3人の作曲家が書いたレクイエムは、「三大レクイエム」と呼ばれ、いずれも名曲として親しまれている。しかし、モーツァルトは未完成、ヴェルディは「宗教曲」というよりはオペラのような「言われ、フォーレは「死に対する恐れが感じられない」と批判されており、どれも世辞にもレクイエムの王道とは言い難い。それにもかかわらず、これらの3曲の人気の高いのは、歌詞が同じで似たようなパターンになりがちな「レクイエム」の中で、強烈な個性を放っているからであろう。

モーツァルト《レクイエム》K626

モーツァルト最後の作品である。死の床で最期まで筆を走らせたが、結局は途中で息絶えてしまった光景は、映画「アマデウス」でも描かれていた。

しかし、この曲を「悲しみ」や「別れ」など情緒的に鑑賞してはいけない。モーツァルトは具体的に亡くなった人のためにこの曲を作曲したわけではなく、あくまでも報酬目当ての仕事として書いたのだ。なので一度、情緒を排して、その構造や手法に注目して鑑賞してみたい。

仄暗い木管楽器が吹く旋律が重なり合っ、合唱の《レクイエム》という歌詞につながついていく演出は実に見事で、冒頭から惹きつけられてしまう。続く「キリエ」の立体的な二重フーガの緊張感から、息つく暇もなく「ディエス・イレ」に

突入し連続パンチを浴びせられる。すっかり打ちのめされたところに、最後の審判のラッパが天から聴こえてくる……（紙面に限りがあるので実際には聴いていただきたい）。

ここまで曲はずっと短調。これだけ短調が続くのは異例である。長調の無邪気な明るさが消え失せ、聴き手の心を絶望感と寂寥感で満たしてしまふ。弦楽器が弾くシンコペーションのリズムは不安感を煽り、明るさ成分を削ぎ落としたパセツト・ホルンとファゴットの響きが僅かな希望の余力を奪う。

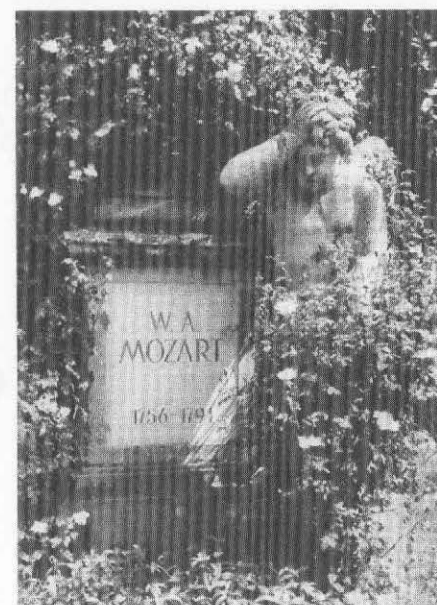
聴きどころ Point 第4曲「トゥーバ・ミルム」のトロンボーン・ソロ

「神の楽器」と言われたトロンボーンが「最後の審判」のラッパを吹き、バス独唱のオブリガートを奏でる。冒頭の音型は十字を切る形になっており、かつて聴き手はそこに神の姿を見たのであろう。



今年8月8日に行われた下野竜也指揮アンサンブル・ヴァガボンスの公演では、フォーレが本来望んだ形に近いとされる編成で演奏された

Recommended
requiem



12月5日に息をひきとったモーツァルト。写真はウィーンの聖マルクス墓地にあるモーツァルトの墓標

ヴェルディ《レクイエム》

数多くのイタリア・オペラの名作を生み出したヴェルディ（1813-1890）の《レクイエム》。この曲の「ディエス・イレ」は、さまざまな映画やテレビCMのBGMとして使われているので、この箇所に限れば、誰もが知っている有名な作品と云っていいだろう。

しかし、1時間半近くかかる全曲を聴いたことのある人はそれほど多くはないはず。オペラのようなストーリーがなく、歌詞がラテン語であることもあって、退屈なのではないかと思っている方もいらっしゃるのではないだろうか。

実は、ヴェルディ《レクイエム》という曲は、外観こそ宗教儀式である「死者のためのミサ曲」の体裁を採っているもの

フォーレ《レクイエム》二短調 Op 48

フランス近代の作曲家フォーレ（1845-1924）の《レクイエム》。

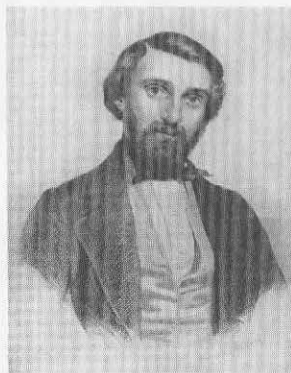
レクイエムなのに、死の暗さや苦しみのようなものは全く感じさせず、まるで天国にいるような幸福感を味わせてくれる。それもそのはず、レクイエムには欠かすことのできない「ディエス・イレ」などの「最後の審判」の場面が省略されており、逆に、一般にレクイエムには含まない「イン・パラダイスム（楽園に）」という、死者が楽園に導かれることを祈る歌で曲を終えているのである。もはや教会の儀式でも何でもなく、フォーレという人の、心の中の想いが描かれ

の、実質的には「大管絃楽と合唱による劇的なオペラ」だと言っても過言ではない。事実、初演のときも、従来のレクイエムを期待した聴衆には不評で、「こんなのは宗教音楽ではない」と評された。まさしくその通りで、教会という空間に合わせて演出した壮大なスペクタクルとして鑑賞すればいいのだ。厳かな合唱、ドラマティックなオーケストラ、オペラティックな独唱陣。「ディエス・イレ」での大地を揺るがすようなバス・ドラムの強打や舞台の外から聴こえてくる最後の審判のラッパも、この曲ならではの聴きどころである。

聴きどころ Point

第2曲「ディエス・イレ」のバス・ドラム

冒頭のオーケストラの全奏による二短調の連打が再び繰り返されたとき、バス・ドラムが全員の拍に逆らって裏拍で打ち込むところ。大地を切り裂くような強打が腹に響く。どのような叩き方をするのかにも注目！



ヴェルディの肖像画

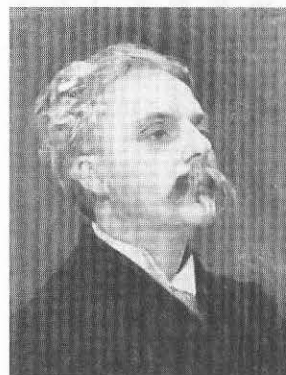


生地イタリアにあるレ・ロンコーレ村の教会で、少年ヴェルディはオルガン弾いていた

聴きどころ Point

第3曲「サンクトゥス」

ハープとヴィオラのアルペジオに乗って、ソプラノと男声が交互に神への感謝を歌う。そこに初めてヴァイオリンが登場し、天に昇るようなパッセージを弾く。フォーレ自身、「この曲でヴァイオリンが天使的な効果があることがわかるはず」と友人のヴァイオリニストに手紙で語っている。



フォーレの肖像画

テキストには
ドラマがある！

レクイエムで歌われる内容

文＝西原 稔
Text＝Minoru Nishihara

同じ「ミサ曲」でありながら、キャラクターは全く違うレクイエム。歌詞やセクシオンが増える分、印象的な場面が多いのも特徴である。ここでは、レクイエムの流れを見ながら歌われている内容について紹介。

イントロイトゥス

レクイエムは「イントロイトゥス（人祭唱）」の（主よ、永遠の安息（レクイエム・エテルナム）を彼らに与え、絶えざる光で照らしください」と始まる。レクイエムという名称は、この人祭唱の冒頭の詩句に基づいている。

「レ」は祭壇の階段に由来するとされ、「使徒書簡」の朗読の後に歌われる。「トラクトゥス」は「死せる信者の魂をあらゆる罪の結びより解放せよ」と歌うが、「グラドゥアルレ」とともにレクイエムで作曲されることは少ない。

「セクウェンツィア」

レクイエムでもっとも重要な場面の一つが、「セクウェンツィア」で、ここで語られているのはイエス・キリストが再臨するとき、すべての人類に対する裁き

が行われる「最後の審判」である。「セクウェンツィア」は次に示すようにいくつかの部分からなる。

まず、冒頭の「ディエス・イレ（怒りの日）」で語られる内容はきわめて激しく、「裁き手の前にすべての者が集められ、すべてが明らかにされ、罪を免れるものはない」と語る。すべてを焼き尽くし、あらゆる死者の罪が再審査されるのがこの日で、死者のためのミサ曲（レクイエム）では必ず含まれる。

「ディエス・イレ」の後に「レコルダレ（思い給え）」に入る。（慈悲深いイエスが地上に降り来たのは私のためであったと始まり、「マグダラのマリヤ」を赦したお方は、私にも希望を与え給うた」と赦しを請う。その後が続くのが「コンフターティス（慰められた者とも）」で、呪われた者どもが劫火のなかに落とされる中で、私を選ばれた者の一人としてほしいと願う。そしてもっとも有名な「ラクリモサ（涙の目）」が次に来る。（罪ある人が赦されるために、塵から蘇るその日に、涙の日である）という詩句で、多くの作曲家がもっとも独創性を発揮する部分である。

「キリエ」は「トラクトゥス」の「キリエ」が歌われたのち、「固有文」の「グラドゥアルレ（昇階唱）」と「トラクトゥス（詠唱）」が置かれる。「グラドゥアルレ」

《レクイエム》の流れ

入祭唱 (Introitus)
キリエ (Kyrie)
昇階唱 (Graduale)
詠唱 (Tractus)
続唱 (Sequentia)
怒りの日 (Dies Irae)
不思議なラッパ (Tuba mirum)
恐るべき大王よ (Rex tremendae)
思い給え (Recordare)
呪われた者ども (Confutatis)
涙の日 (Lacrimosa)
奉献唱 (Offertrium)
主イエス・キリスト (Domine Jesu)
賛美の生贄と祈り (Hostias)
聖なるかな (Sanctus)
祝福されますように (Benedictus)
神羊誦 (Agnus Dei)
聖体拝領唱 (Communio)
赦祷文 (Responsorium) (Libera me)
楽園に (In Paradisum)

(※固有文と通常文をあわせた表記となっています)

《レクイエム》とは「死者のためのミサ曲」で、通常のミサの典礼とは異なり、レクイエムでは「固有文」の担う部分が多い。ミサ曲の定番の「グロリア」や「クレド」は含まれず、全体の構成も通常のミサ曲とは大きく異なる。（上図参照）



ミケランジェロの『最後の審判』のフレスコ画の一部

「オッフエルトリウム」
「オッフエルトリウム（奉献唱）」のときに聖体拝領のパンとぶどう酒（ワイン）が準備される。「オッフエルトリウム」は「ドミニ・イエス（主、イエス・キリスト）」と「オステイアス（賛美の生贄と祈り）」

の二つの部分からなる。「ドミニ・イエス」では、死んだ信徒すべての魂を、地獄の淵と底なしの深淵から救い出してくださいと祈り、「聖ミカエルが彼らの魂を聖なる光に導かれますように」と祈願する。聖ミカエルは、人間の魂を天秤にかけて測る天使で、絵画では左手に秤を持った構図で描かれることが多い。続く「オステイアス」では、主よ、かれらを死から生命へと移し給えと祈願する。

「サンクトゥス」

ミサ曲におけるのと同じテキストで3回（サンクトゥス 聖なるかな）を唱えて始まる。



ガイド・レーニの描く『聖ミカエル』

Explanatory notes of a text

酒を拝領する際に「コムニオ（聖体拝領唱）」が歌われ、永遠の光明を彼らの上に輝かせ給え、主よ、永遠の安息を彼らに与え給えと祈願する。この部分の詩句は「ルクス・エテルナ」と始まることから、この語で呼ばれることが多く、リゲティのようこの語をタイトルとした作品もある。

「リベラ・メ・イン・パラダイスム」

葬儀の祈りの後に「リベラ・メ（私を解放せよ）」と「イン・パラダイスム（楽園に）」が置かれることがあり、埋葬のときに歌われる。これらはフォーレの《レクイエム》などで取り入れられている。

テキスト ミステリー

モーツァルト《レクイエム》～テキストの欠落の謎～

モーツァルトはシュトゥットガルト伯爵からの依頼で死者のためのミサ曲の《レクイエム》(K626) 作曲に着手するが、病状の悪化のために「ラクリモサ」の第8小節までで絶筆となった。作品は契約済みであったために、妻のコンスタンツェはヨーゼフ・アイブラーに補筆完成を委嘱する。彼はモーツァルトの作曲した部分までのオーケストレーションを行ったものの、この補筆完成を断念。次に引き受けたフランツ・クサーヴァー・ジュスマイヤーは、新たにオーケストレーションをし直すとともに、未完成に終わった「ラクリモサ」の9小節以降の部分の補筆・完成した。早い時期からこのジュスマイヤーの補筆完成に対しては疑問が投げかけられ、新たに何種類もの補筆完成版が作られている。

リチャード・モンダーはジュスマイヤー版のオーケストレーションの改訂に加えて、「サンクトゥス」と「ベネディクトゥス」を全面削除し、その代わりに、その後発見されたスケッチをもとに「セクウェンツィア」を締めくくるフーガを加えた。また、ロビン・ランドンは「セクウェンツィア」のオーケストレーションについては、アイブラーの補筆を採用し、そのほかはジュスマイヤー版を尊重した版を編んだ。ロバート・レヴィンは指揮者のヘルムート・リリンクの依頼を受けて、アイブラー版のほかにジュスマイヤー版も取り入れているものの、モーツァルトがまったく手掛けなかった「サンクトゥス」以下の部分については独自の補作を行った。そのほかにも新たな版が編まれており、モーツァルトの《レクイエム》は「永遠のトルソーといえる」のではないだろうか。

「ベネディクトゥス」

ミサ曲でもレクイエムでも「サンクトゥス」と一体で扱われることが多い。主の御名によって来給う者は祝されよ」と歌う。

「アニュス・デイ」

パンを切り分けるときに歌われるのがこの「アニュス・デイ（神羊誦）」で、ミサ曲でも用いられるが、ミサ曲では（我らに平安を与え給え」という詩句が、「レクイエム」では（彼らに永遠の安息（レクイエム・センピテルナム）を与え給えと変えられる。

「コムニオ」

ミサでは、「アニュス・デイ」の後に「イテ・ミッサ・エスト」で締めくくられるが、レクイエムでは、パンとぶどう

音楽評論家
奥田佳道
が選ぶ

おすすめ《レクイエム》3選

ブラームス《ドイツ・レクイエム》、ベルリオーズ《レクイエム》、デュリユフレ《レクイエム》

文 奥田佳道
Text Yoshinichi Okuda

前ページで紹介した「三大レクイエム」以外にも、数多くのレクイエムが残されている。「さて、次は何を聴こう？」と迷っている方にぜひおすすめしたい作品を音楽評論家の奥田佳道氏に選んでいただいた。作曲家渾身の《レクイエム》。スケールの大きい世界感にとどろきと浸ってみたいのが、この3選。

ブラームス《ドイツ・レクイエム》Op.45

ブラームスの芸術の精華、昇華がこころにある。個人的には、最高傑作と言ってしまいたい。ラテン語のレクイエムではなく、一つのドイツ語によるレクイエム。つまり「Ein deutsches Requiem, A German Requiem」だ。全7曲から成る。

プロテスタント文化圏のハンブルクに生まれ、カトリックのウィーンを拠点に活躍したブラームス（1833-1897）。

歌詞は、マルティン・ルターが1534年にドイツ語訳した聖書の詩句から選ばれている。冒頭の合唱（Selig sind die

ベルリオーズ《レクイエム》Op.5

「桁外れ」の楽器編成を、ライヴで体験したい気宇壮大なレクイエム。

フランス語の原題にある「Grande」——鼻にかける発音は好きにならないうぞ——に偽りは、ない。テノールこそ一人だが、オーケストラの編成、混声6部のコーラス、東西南北に置かれるパンダ管楽器の別働隊を記すだけで、与えられた欄を使い切ってしまうのではない。パソン（ファゴット）8、ホルン12、ティ

da Leid tragen（哀しんでいることは、幸いである）は、マタイによる福音書5:4から採られた。

創作の過程は少々複雑だ。1859年頃、ブラームスが26歳の年に、まず「第2部」が完成、その後1866年に「第3部」「第1部」「第7部」が創られている。1867年暮れ、ウィーンの王宮舞踏会場でドゥーテンザールでの楽友協会

指揮者カール・マルティン・ラインターラーのアドヴァイスもあり、ドイツ北部ンパニ16（ベア6、シングル4）、第1ヴァイオリンと第2ヴァイオリンが最低でも25人ずつ。パンダのトランペット12、トロンボーン16……。このあたりで止めておく。

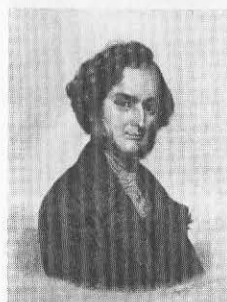
フランス政府の依頼で1837年に作曲された。政府は、7月革命（1830年）や歴史的事件の犠牲者を追悼する慰霊祭での音楽を求めたのだった。

1830年暮れに、あの《幻想交響曲》

聴きどころ Point

第2曲「ディエス・イレ」「トゥーバ・ミルム」で魅せ場をつくるパンダ

金管の別働隊は四方4カ所に配置される。広大な、しかし閉じられた礼拝堂の空間を意識した桁外れの響き。いっぽう、他の楽章では「静寂」もキーワードとなる。



ベルリオーズの肖像画



ブラームスの肖像画

聴きどころ Point

第3曲《主よ、わが終わり》

フォルテで終わるのは、この「第3曲」と「第6曲」のみ。バス独唱による詩篇第39章で始まる「第3曲」は、壮麗なF音の持続に魅了される。

ブラームスが夏に過ごしたリヒテンタールの家。すぐ近くにはクララ・シューマンが住んだ家があり、ここで《ドイツ・レクイエム》も作曲されたとされる

デュリユフレ《レクイエム》Op.9

フォーレの《レクイエム》を愛する人は、デュリユフレの《レクイエム》も愛する。それが決まりである。曲は1947年、フランス音楽史に名を刻む音楽出版社デュラン社の依頼で書かれた。デュリユフレはこのとき45歳。フォーレ、ドビュッシー、ラヴェルらによって培われた教会旋法の愛すべき継承者がデュリユフレで、長調と短調を超越した摩訶不思議な、しかし最高に精妙な筆致は、聴き手を捉えて離さない。このレクイエムを聴いて何も感じない人とは、友だちになりたくない。デュリユフレはオルガニスト、プロフェッサーとしても優れ、パリ

国立高等音楽院の、彼の和声科には、昨今「ピアノ協奏曲」や「交響曲」が話題となったヴェテラン尾高惇忠（1944-）も在籍していた。

このレクイエムはメゾ・ソプラノとバリトンのソロ、混声合唱、オルガン、オーケストラのために書かれた。オーケストラのパートは、室内オーケストラ、オルガンと任意のチェロでも演奏可能。そういう版が出ている。

「入祭唱」「キリエ」「オフフェルトリウム」（バリトン独唱含む）、「サンクトゥス」「ピエ・イエズ（慈悲深いイエスよ）」（メゾ・ソプラノ独唱含む）、「アニ

これも聴きたい！ まだまだある《レクイエム》

ウィーン・オペレッタの始祖スッペの《レクイエム》二短調をお勧めする。「オペレッタのスッペが！」などと誤知りで言っているはいけない。モーツァルトの《レクイエム》好きは、きっとスッペも好きになる。どちらも二重フーガが際立つからだ。

1855年の作品、スッペはこのとき36歳。その5年前に亡くなった劇場監督、フランツ・ボコニーなる恩人に捧げた曲である。敬虔なレクイエムだが、そこはスッペ。後年のオペレッタを連想

聴きどころ Point

第7曲「イン・パラディスム」

〈天使たちが天国へ導いてくださいますように、あなたを迎えます〉と歌われる。天上の表現にチェレスタ、(天井への架け橋、階段の表現) ハープは欠かせない。



デュリユフレ



ウィーンにあるスッペの墓

ドン兄弟でモーツァルトの親友だったミヒャエル・ハイドゥンに名作がある。ザルツブルクの大同教ジキスムンドの他界に寄せて書かれたハ短調の《レクイエム》（1771）で、モーツァルトも何度か聴いている。ミヒャエル・ハイドゥンにはもう一つ、未完の《レクイエム》変ロ長調で演奏された。モーツァルトの《レクイエム》後、の作品だ。19世紀前半のウィーンでは、ルイジ・ケルビーニが重要なレクイエム作曲家でもあった。

つ、そこは鬼才ベルリオーズ。文を自由に組み替えている。全10曲。この上なく烈しい3曲と折りの情趣に満ちあふれた7曲から成る。

ベルリオーズは「自分の作品がすべて破棄されることがあっても、このレクイエムだけは残してほしい」旨の言葉を遺している。

19世紀中葉のシューマンに惹かれつつ、後半に想いを寄せれば、英バレーガムのフェスティヴァルから委嘱されたドヴォルジャークの《レクイエム》がいい。彼の《スターバート・マートル》とともに忘れてはいけない佳品だ。

ブリテンの《戦争レクイエム》（1962年初演）は20世紀に書かれた、最もメッセジ性豊かな大作で、これは定期的に聴きたい。



ミサ曲、レクイエムだけじゃない！
さまざまな「宗教音楽」を聴く

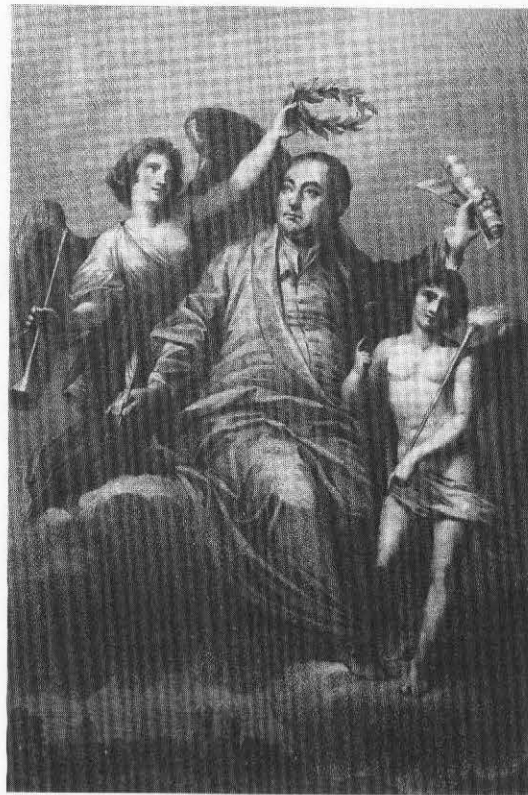
文：加藤拓末
Text: Takumi Kato

「オラトリオ」、「カンタータ」、「スターバト・マーテル」、「テ・デウム」、「モテット」、「アヴェ・マリア」

これまでは「ミサ曲」、「レクイエム」を中心に紹介してきたが、ここではそれ以外の6種類の「宗教音楽」のジャンルからおすすめの宗教音楽作品を音楽学者・加藤拓末氏に選んでいただいた。それぞれ違ったテイストの作品を、その日の気分を選んでみてはいかが？

オラトリオ

ヘンデル《メサイア》HWV56
「大コーラス、ハレルヤ・コーラスとアーメン・コーラスは必聴！」
ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル（1685-1759）のオラトリオ《メサイア（救い主）》ほど人類に愛されている作品も少ないだろう。気がつけば1742年の初演から約300年間、一度もすたれることなく今日まで演奏され続け



右手にペン、左手に楽譜を丸めてもったヘンデル

られているという驚異の作品である。しかもヘンデルは1741年の夏に、わずか2週間という短期でこの曲を書き上げたというから、にわかには信じがたい。作品は全3部からなり、歌詞は旧約・新約聖書から聖句を選び、それらを結びあわせるように構成されている。「第一部」では救い主の「降誕」の様子を伝え、さらに救い主がどのような方なのか、その性格について説いている。「第二部」では救い主の「受難」「復活」「昇天」と「神

の国」の到来について、そして「第三部」では「永遠の命の教え」についての考察と、神への感謝が歌われる。この作品の魅力は、英語の聖書の言葉とヘンデルの崇高な音楽の融合によって生じる相乗効果の素晴らしさにある。ヘンデルの音楽は全曲を通じて気迫に満ちており、とても2週間で完成したと思えない出来栄。とりわけ有名な「第二部」の終曲であるハレルヤ・コーラスと、壮麗な「第三部」の終曲であるアーメン・



ピアノ独奏用に編曲したマイラ・ヘス(p)

コーラスは聴きどころである。

カンタータ

J・S・バッハ「カンタータ《心と口と行いと生活》」BWV147
心に沁みいるコーラルのメロディとバッハが書いた美しい伴奏を聴くべし！

J・S・バッハは、カンタータというジャンルを一つの究極の形にまで高めた。そうしたJ・S・バッハのカンター



バッハの家庭での「朝の祈り」

タ作品のなかで《心と口と行いと生活》BWV147は最も人気の高い作品の一つ。この作品は1723年に作曲されたJ・S・バッハが市の音楽監督を務めていたライプツィヒで教会における礼拝の一環として演奏された、2部構成の全10曲である。

トランペットをともなった軽快な冒頭の合唱曲、せつせつと語りかけるレチタティヴォ、宝石のようにまばゆい4つのアリア——すべてが聴きどころと云っていい。とりわけ「第一部」と「第二部」のそれぞれの締めくくりとして、歌詞は異なるが同じコーラル合唱曲が置かれている。これは17世紀以来の伝統的な賛美歌の旋律に、J・S・バッハが三連符にもとづく、美しくも鮮やかな伴奏を施した楽曲である。この楽曲は、英国のピアノリスト、マイラ・ヘスによってピアノ独奏用に編曲され、《主よ、人の望みの喜びよ》という題名で広く知られるようになった。素朴な旋律と、絶えず揺れ動くような伴奏のリズムとがよくあい、いつ聴いても心に沁みいる美しい終曲である。

スターバト・マーテル

ペルゴレージ《スターバト・マーテル》
冒頭の二重唱で二つの声がハモリ出す「瞬間」を要チェック！

宗教詩「スターバト・マーテル」ドロロ「サ」にもとづく音楽として、お勧めしたいのはジョヴァンニ・バッティスタ・ペルゴレージ（1710-36）の作品で



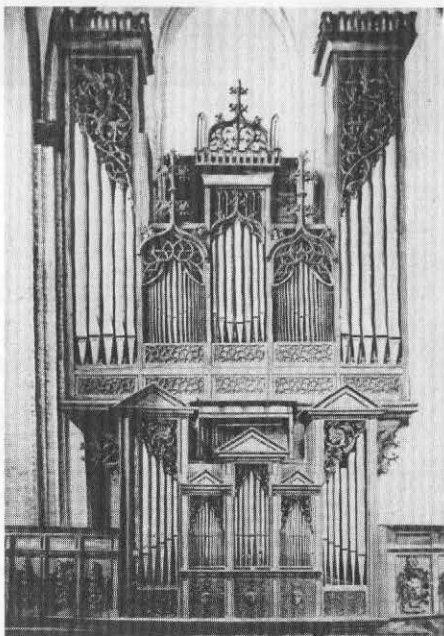
ペルゴレージの肖像画

ある。生来、病弱だったペルゴレージは1735年の夏ごろから健康状態が悪化し、1736年2月にナポリ近郊の修道院に入って療養に努めたが、間もなく3月16日に26歳の若さで死去した。その死の直前に修道院で作曲されたのが、この《スターバト・マーテル》である。

ソプラノ独唱、アルト独唱、弦楽大合奏、通奏低音のための作品で、全12曲からなり、聖母マリアの苦悩に思いを寄せる前半6曲は二重唱と独唱を交互に配し、聖母マリアに祈りを捧げる後半の6曲は二重唱が主体の構成となっている。

26歳という若さで死に直面したペルゴレージだからであろうか。全体の曲調は悲しみに満ちているも、触れれば壊れそうな、はかなさにも彩られている。たとえば「第一曲」で、アルトとソプラノが歌い出し、声が重なる刹那、音がぶつかつて不協和音が生じる。その瞬間に、言い

Various Religious music



オルガン

ようのないはかなさを感じる。そうした繊細な美しさを堪能していただきたい。

テ・デウム

シャルパンティエ《テ・デウム》H146

とにかくカッコいい最初の曲。どこかで聴いたことがあるのでは？

マルカントワーヌ・シャルパンティエ（1643頃-1704）は17世紀後半のパリで活躍した音楽家。イタリアに留学し、オラトリオの大家カリッシミに学び、劇音楽の技法をフランスに導入した人物である。威勢の良い、快活な前奏曲で知られる彼の《テ・デウム》は、1680年代後半ないし90年代ごろに作曲された。この前奏曲は、オルガン独奏用の編

曲で演奏されることも多い。

この作品は、フランス王ルイ14世の宮廷のために作曲されたと考えられていたが、近年ではバリのサン・ルイ教会（イエズス会の重要な教会）のために書かれた可能性が高いとわかってきた。ただし、何の機会のために作曲されたのかは判然としない。

聴きどころと言えば、なんといっても有名な冒頭の「前奏曲」。これはロンド形式で、トランペットと打楽器が活躍する主要な部分と、中間部である弦楽合奏の部分が交互に演奏される。その後、壮麗な合唱と、繊細な歌い口の独唱が交互に歌われ、ゆるやかに連なっていく。



パレストリーナの肖像画

3大アヴェ・マリア〜J.S.バッハ（グノー編曲）、シューベルト、カッチーニ）を聴く〜

《アヴェ・マリア》は新約聖書の「受胎告知」の場面がもとになっており、神の子を授かった乙女マリアに対する祝福の歌である。歌詞はラテン語。



J.S. バッハの胸像

フランスの作曲家シャルル・グノー（1818 - 93）は、J.S. バッハ『平均律クラヴィーア曲集』第1巻の〈前奏曲〉BWV846-1を伴奏部とみなし、そこに自ら旋律を加え、さらにアヴェ・マリアの歌詞を付けて宗教的歌曲を完成させた。これが1859年に発表されたグノーの《アヴェ・マリア》で、J.S. バッハの音楽を含んだその美しさから世界中で愛されている。

これに対し、オーストリアの作曲家フランツ・シューベルト（1797 - 1828）作曲《アヴェ・マリア》の歌詞は、詩人ウォルター・スコットによる叙事詩『湖上の美人』から採られたもの。出だしこそ〈アヴェ・マリア〉と歌われるが、その後の歌詞は異なっており、しかもドイツ語。その内容とは、王から追われる身となった“湖上の貴婦人”ことエレン・ダグラスが救いを求め、聖母マリアに祈ったときの言葉である。柔らかに包み込むようなシューベルトの音楽が印象的。



グノーの肖像画

そしてカッチーニの《アヴェ・マリア》は初期バロック時代にイタリアで活躍したジュリオ・カッチーニ（1550頃 - 1618）の作として知られるが、実際にはソ連（現・ロシア）のギター奏者ウラディーミル・ヴァヴィロフ（1925〜73）が「本当の作曲者」と目されている。彼は自分の名前を伏せ、代わりに古典作曲家の名前を借りて作品を発表する習性があった。この曲もそうした例と考えられる。実はバロック音楽ではなく、20世紀の現代曲である。



シューベルトの肖像画

モテット

パレストリーナ《鹿が谷川の水を慕つよに》

ピュアなハーモニーは天国気分！

数あるモテットのなかで一つ挙げるとするならば、ジョヴァンニ・ピエルリ・ジ・ダ・パレストリーナの《鹿が谷川の水を慕うよに》であろうか。パレストリーナ（1525/26 - 94）は16世紀後半のイタリア教会音楽を代表する作曲家。30歳代で頭角を現し、1571年に権威あるローマ教皇庁のジュリアン・堂楽長に就任、終生この地位を守った。《鹿が谷川の水を慕うよに》は1581年に出版された4声のモテット。2部構成（第1部だけの演奏もある）で、歌詞は旧約聖書『詩編』第41（プロテストントでは第42）編から第2〜4節が採られている。このモテットではパレストリーナ特有の「息の長い美しい旋律」が、各声部でまんべんなく模倣されていく。そして前の部分が完全に終わらないうちに、新たな旋律が登場することで各声部の旋律の切れ目が重ならなくなり、全体としては音楽がとぎれずに永遠につづくような印象を与える。こうしたパレストリーナの流れるような美しい音楽は音楽史上、一つの「理想」として高く評価されている。

「特別インタビュー」

鈴木優人

宗教音楽を語る

文＝山田治生
Text＝Hideo Yamada
写真＝堀田力丸
Photo＝Rikimaru Hotta

これまでバッハ・コレギウム・ジャパン（BCJ）でさまざまな宗教音楽に取り組み、今年9月にはBCJの首席指揮者に就任した鈴木優人に宗教音楽の面白さについて訊いた。

失恋しなくても

失恋ラヴ・ソングはわかる

西洋の宗教音楽のほとんどがキリスト教の音楽ですが、キリスト教の信仰のない多くの日本人が宗教音楽に親しむにはどうすればよいのでしょうか？
「うちはみんなクリスチャンなので、それに対してはうまく答えられませんが、例えば、失恋ラヴ・ソングがあるとして、失恋しなくてもそのラヴ・ソングはわかるし、失恋したときにはもつと心にグツときたりしますよね。ある意味、宗教音楽もそれに似ていると思います。宗教や歌詞の内容について知識を得たら、知的好奇心の分、面白くなります。でも一番大事なのは音楽への愛だと思っています。『音楽が好きだから聴く』ということ」

作曲家たちの精緻な世界

「ミサ曲は、通常、ラテン語の典礼文をテキストとしていますね。
「テキストは、作曲家にとって大事なソ

Interview with Masato Suzuki



ースであり、作曲の拠り所なのですが、ミサ曲の場合はその拠り所がしっかりとしています。言葉の一言一句を変えられない制約が、かえって作曲家に自由な発想を生み出すこともあります。J・S・バッハ《口短調ミサ》の完璧なカノンやフーガなどの構造美は、歌詞が絶対に変えられないからこそ作り上げられた精緻な世界と言えるでしょう。

また、作曲家が「十字架の音型」や「13段」などの象徴性を曲に埋め込むこともあります。J・S・バッハ《マタイ受難曲》の、レチタティーヴォでテノールと通奏低音がずっと演奏しているところで突然、合唱が（確かにこの人は神の子であった）と2小節だけ歌う箇所があるのですが、そこは、自筆譜を見ると、十字架の形になっているのです！ ミュージ

■鈴木優人 Masato Suzuki

1981年オランダ生まれ。東京藝術大学作曲科及び同大学院古楽科修了。
ハーグ王立音楽院修士課程オルガン科を首席で、同音楽院即興演奏科を栄誉賞付きで日本人として初めて修了。アムステルダム音楽院チェンバロ科にも学ぶ。第18回ホテルオークラ音楽賞受賞。2018年9月よりバッハ・コレギウム・ジャパン首席指揮者に就任。音楽監督を務めるアンサンブル・ジェネシスでは、オリジナル楽器でバロックから現代音楽まで意欲的なプログラムを展開する。
指揮者としてこれまでにバッハ・コレギウム・ジャパン、アンサンブル金沢、九州交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、東京交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、広島交響楽団、横浜シンフォニエッタ、読売日本交響楽団等と共演。

■公演情報
 ◎バツハ・コレギウム・ジャパン
 ▼第130回定期演奏会
 〈日時・会場〉11月23日15時・東京オペラシティコンサートホール〈出演〉鈴木雅明(指揮)、ハナ・ブラシコヴァ(S)、他(曲目)J・S・バッハ《クリスマス・オラトリオ》オラトリオ(問合せ)①バツハ・コレギウム・ジャパンチケットセンター03・5301・0950
 ▼バツハ・コレギウム・ジャパンJ・S・バッハ《クリスマス・オラトリオ》
 〈日時・会場〉11月24日15時・彩の国さいたま芸術劇場音楽ホール〈出演〉鈴木雅明(指揮)、ザッカリ・ワイルダー(ト)、他(問合せ)彩の国さいたま芸術劇場0570・064・939
 ▼サントリールホールクリスマスコンサート2018 バツハコレギウムジャパ《メサイア》(ヘンデル)
 〈日時・会場〉12月23日15時サントリールホール(大)〈出演〉鈴木雅明(指揮)、森谷真理(S)、藤村実穂子(A)、他(問合せ)サントリールホールチケットセンター0570・55・0017
 ▼第131回定期演奏会 祈りのカンタータ「J・S・バッハ」教会カンタータ・シリーズ Vol 75
 〈日時・会場〉2019年3月3日15時・東京オペラシティコンサートホール〈出

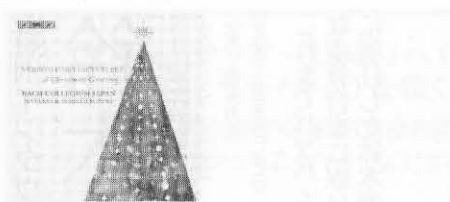
演〉鈴木雅明(指揮)ロビン・ブレイス(A)、加来徹(Bs)、他(曲目)J・S・バッハ《泣くこと、嘆くこと、案ずること、怯えること》BWV12、他(問合せ)バツハ・コレギウム・ジャパンチケットセンター03・5301・0950
 ▼第132回定期演奏会 受難節コンサート2019《マタイ受難曲》(J・S・バッハ)
 〈日時・会場〉①2019年4月19日18時30分②4月21日16時・東京オペラシティコンサートホール〈出演〉鈴木雅明(指揮)、櫻田亮(エヴァンゲリスト)、他(問合せ)バツハ・コレギウム・ジャパンチケットセンター03・5301・0950
 ◎天使のおくりもの〜聖なるクリスマス〜2018
 〈日時・会場〉①12月1日14時・シエルターなんよう(南陽市文化会館)②12月2日15時・東京オペラシティコンサートホール③12月5日19時・茅ヶ崎市民文化会館(大)④12月6日19時・調布市文化会館(大)⑤12月7日18時30分・彩の国さいたま芸術劇場音楽ホール⑥12月8日17時・館林市三の丸芸術ホール〈出演〉オマール・トマゾーニ(地)、マリア・ファン・ストラレン(S)、他(曲目)3大アヴェ・マリア(J・S・バッハ)グノー、シユーベ

ルト、カッチーニ、他(問合せ)インプレサリオ東京03・6264・4221
 ◎パリ木十字架少年合唱団
 〈日時・会場〉①11月27日19時・紀尾井ホール②12月1日14時・京都コンサートホール(大)〈共演〉ユーゴ・ギュティエレス(指揮)Org、p、他(曲目)カッチーニ《アヴェ・マリア》、他(問合せ)①紀尾井ホールチケットセンター03・3237・0061②京都コンサートホール075・711・3231
 ◎JVC国際協力コンサート2018
 〈日時・会場〉①東京公演・12月1日15時・昭和女子大学人見記念講堂②大阪公演・12月8日14時・いずみホール〈出演〉ヨス・ファン・フェルトホーフェン(指揮)、マリアナ・ピメンタ(S)、他(曲目)①東京公演・ヘンデル《メサイア》②大阪公演・J・S・バッハ《クリスマス・オラトリオ》(第1〜4部)(問合せ)JVCコンサート事務局(石川)03・3836・4108
 ◎ドレスデン聖十字架教会合唱団クリスマス・コンサート

〈日時・会場〉12月4日13時30分・東京オペラシティコンサートホール〈音楽監督・指揮〉ローデリッヒ・クライレ〈曲目〉グラーバー《きよこの夜》、他(問合せ)ジャパン・アーツびあ03・5774・3040
 ◎サンクトペテルブルグ室内合奏団クリスマス・アヴェ・マリア
 〈日時・会場〉①12月7日19時よりみうり大手町ホール②12月8日11時30分&15時・22日11時30分&15時・25日14時・東京オペラシティコンサートホール③12月11日14時・東京文化会館(大)、他〈出演〉マリナ・トレグボヴィッチ(S)、ヴェラ・チエカノヴァ(S)、他※歌手は来日する2名のうち、公演ごとにいずれか1名が出演予定(曲目)3大アヴェ・マリア(J・S・バッハ)グノー、シユーベルト、カッチーニ、他(問合せ)光臨社チケットセンター050・3776・6184
 ◎昭和音楽大学「第43回《メサイア》(ヘンデル)」
 〈日時・会場〉12月15日15時・昭和音楽大

関連コンサート・書籍紹介

「宗教音楽」にまつわる公演、書籍をまとめて紹介いたします。



■Information
 ◎最新アルバム
 「きよこの夜/BCJのクリスマス」
 《もろびと声あげ》、《まきびとひつじ》、《キャロル・メドレー》、他
 バツハ・コレギウム・ジャパン(合唱とソロ、歌唱はアカペラ)、鈴木雅明(指揮)、鈴木優人(編曲&org)
 [KI-KKC 4148]

がテキストの内容を表現します。そのほか「ディエス・イレ(怒りの日)」のように、言葉がなくても内容を伝えることができる旋律もあります」
 作曲家、指揮者、オルガン奏者としての多岐にわたる音楽活動
 —鈴木さんはモーツァルトの《レクイエム》を補筆完成させ、先日BCJでその指揮もされましたね。
 「本当に天才的な音楽だと思いました。舞台上で指揮しながらモーツァルトの凄さを感じました。今回、数年前に書いた短いアーメンのフーガを自分で初めて指

揮してみても、『短いところがモーツァルトを邪魔してなくていいな』と思いました(笑)。ジュスマイヤーも本当にがんばっていたと思います。でもちよつと音を変えてゴメン(笑)」
 —来年7月は神奈川フィルハーモニー管弦楽団でハイドン「オラトリオ《天地創造》」を指揮されますね。
 「天地創造の物語はクリスマスチャンにとつては基本的なストーリーです。荒唐無稽な話ですが、子供の頃から知っていて、僕らの心の中に強く残っています。混沌から人間ができるまでを描き、人間ができたことが良いことなのか、そうでないのか

まで問いかけます。1798年初演です。当時66歳のハイドンが、その歳でこの大作を書き上げたのは信じがたい」
 —最近、BCJとクリスマス・アルバムを作られましたね。
 「世界のみなさんへのクリスマス・プレゼントだと思って、作りました。BCJのア・カペラ能力は素晴らしい。でもこれはバロックのアルバムではありません。バロック時代は通奏低音の時代なので、通奏低音がないア・カペラは特殊な瞬間だけなのです。聴衆のみなさんはBCJがこういうCDも作るのかと驚かれるかもしれませんね」

宗教や歌詞の内容について
 知識を得たら、知的好奇心の分、
 面白くなります



「幼いころから『ラテン語』を眺めるのが好きだった」と語る鈴木さんが、ラテン語に強烈なショックを受けたのは中学時代。当時の同級生からの影響だったとか



学アトロ・ジリオ・ショウワ(出演)
山銀(指揮)、倉本裕里(S)、他
合せ)昭和音楽大学チケットセンター0
44・953・9899
◎東京芸術劇場パイオルガンコンサ
ートVol 23「クリスマスに贈る真夜中
のミサ」
〈日時・会場〉12月20日19時・東京芸術
劇場(出演)小林英之、新山恵理(どち
もOrg)、他(曲目)シャルパンティエ「真
夜中のミサ」より「キリエ」、「グロリー

ア」、他
◎東京交響楽団 第67回定期演奏会
〈日時・会場〉2019年1月12日18時
〈出演〉ロレンツォ・ヴィオッティ(指揮)、
森谷昌理(S)、他(曲目)ヴェルディ「レ
クイエム」〈問合せ〉TOKYO SYMP
HONY チケットセンター044・52
0・1511
◎第16回ヘンデル・フェスティバル・
ジャパン オラトリオ「ソロモン」
〈日時・会場〉1月14日15時30分・浜離
宮朝日ホール(出演)三澤寿喜(指揮)、
波多野睦美(Ms)、他〈問合せ〉HFJ事
務局(三澤)0297・82・7392
◎大和証券グループ Presents
リッカルド・ムーティ指揮シカゴ交響
楽団 2019年日本公演
〈日時・会場〉1月31日19時・2月2日14
時・東京文化会館(大)〈共演〉ヴィット
リア・イエオ(S)、ダニエラ・バルチェ
ッローナ(Ms)、他(曲目)ヴェルディ「レ

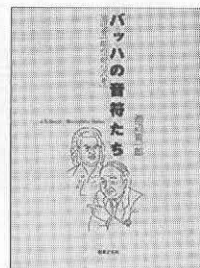
クイエム」〈問合せ〉NBSチケットセン
ター03・3791・8888
◎びわ湖ホール声楽アンサンブル東京
公演Vol 10 バロック声楽作品の精華
〈日時・会場〉2月11日14時・東京文化
会館(小)〈出演〉本山茶毅(指揮、解説)、
ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、
他(曲目)J・S・バッハ「カンタータ第
70番『目を覚まして祈れ、祈りて目を覚
ませ』」他〈問合せ〉びわ湖チケットセン
ター077・523・7136
◎NHK交響楽団 第1880回定期
公演Cプログラム
〈日時・会場〉2月16日19時・NHKホ
ール(出演)パーヴォ・ヤルヴィ(指揮)、
榎本大進(Vn)、他(曲目)フォーレ「レク
イエム」、他〈問合せ〉N響ガイド03・
5793・8161
◎神奈川フィルハーモニー管弦楽団
▼定期演奏会 県民ホール名曲シリ
ーズ第4回

〈日時・会場〉2019年2月23日15時・
神奈川県民ホール(出演)川瀬賢太郎指
揮、浜田理恵(S)、他(曲目)ヴェルディ
「レクイエム」〈問合せ〉神奈川芸術協
会045・453・5080
▼定期演奏会 みなとみらいシリ
ーズ第350回
〈日時・会場〉2019年7月13日14時・
横浜みなとみらいホール(出演)鈴木優
人(指揮)、澤江衣里(S)、他(曲目)ハ
イドン「オラトリオ『天地創造』」〈問合せ〉
神奈川フィル・チケットサービス0
45・226・5107
◎ドイツ・レクイエム 特別演奏会
〈日時・会場〉2019年2月27日19時・
サントリーホール(大)〈出演〉福島章恭
(指揮)、平井香織(S)、他(曲目)ブラ
ームス「ドイツ・レクイエム」他〈問合せ〉
国際親善音楽交流協会03・340
6・3355

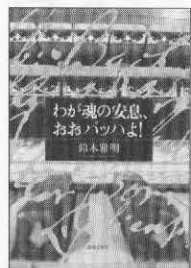
関連書籍



『オルフェ・ライブラリー
新版 古楽のすすめ』
金澤正剛 著
音楽之友社
本体2400円+税



『バッハの音符たち
池辺晋一郎の「新バッ
ハ考」』
池辺晋一郎 著
音楽之友社
本体2500円+税



『わが魂の安息、おおバ
ッハよ!』
鈴木雅明 著
音楽之友社
本体4900円+税
※品切れ



『バロック音楽 歴史的
背景と演奏習慣』
アントニー・パートン 著
角倉一朗 訳
音楽之友社
本体3000円+税



『キリスト教と音楽 ヨ
ーロッパ音楽の源流を
たずねて』
金澤正剛 著
音楽之友社
本体2800円+税



『詩篇の音楽 旧約聖書
から生まれた音楽』
寺本まり子 著
音楽之友社
本体4200円+税



『ミサ曲・ラテン語・教
会音楽ハンドブック
ミサとは・歴史・発
音・名曲選』
三ヶ尻正 著
株式会社ハンナ
本体1800円+税



『グレゴリオ聖歌の世
界 (CD付き)』
リチャード・L.クロッ
カー 著
古川文 訳
音楽之友社
本体7000円+税

クラシック音楽でピアノの曲といえばショパンを思い浮か
べることが多いだろう。ロマン派、ヴィルトウオーズ時代
と共に発達した現代のコンサート・グランドピアノの表現
力は、さまざまなショパ
ンの演奏スタイルを可
能とした。いっぽう
で、楽譜については
第二次世界大戦後す
ぐに「原典版」の出版が
始まる。ピアノ曲においては
いち早く、バロックや古典時代の作曲
家を中心に、19世紀末に改編された楽譜
の見直しが行われ
始め、1970年
代後半〜80年代以
降は、原典版で勉
強することは「当
たり前」のこととなるに至った。そんな中、
2000年代に入り、ショパン時代のピア
ノ、いわゆるピリオド楽器(古楽器)が見
直され、現代のコンサート・グランド
とは違った楽器の機能と当時のスタイ
ルを踏まえて、演奏を考え直すとい
う動きが一部のピアニストたちの間に起こ
った。その動きはついに今年、ショパンの聖地ワル
シャワでピリオド楽器のためのショパン・コンクールが
行われるまでになったのだ。そこで今号では、現在のショ
パンの演奏スタイル、そしてショパン時代のプレイエルなど
のピリオド楽器でのスタイルを対比させ、ショパン演奏のピ
アニズムを探っていくと思う。

特集Ⅱ ショパンのピアニズムを探求する

It explore Chopin's
performance style